# 続・幼年期―郷原直太の場合

# にくだん

中村太郎

【一】

直太は小学二年生に上がっていた。

彼が通う小学校には、新旧二棟の校舎があった。それにあと体育館と図書館もくわえ四棟の建物と、屋外プールに屋根だけ付いた相撲場。入学当初、今よりもっと小っちゃかった一年前の直太には、新校舎も体育館も巨大で、運動場も砂漠みたいに広大に感じられた。

近現代的な鉄筋コンクリート三階建ての新校舎は、落成してからの年数もまだ浅く、運動場に面して南側に位置することから「南校舎」と呼ばれていた。一階から三階まで一年通して陽あたりがよく、晴れた日中はどこの教室も電灯が要らぬくらい明るかった。外観もアイボリーホワイトの外壁がベランダの群青色に塗られた鉄柵と照り映え、陽ざしの下で淡い輝きを放つ様子は、瀟洒な背広に身を包んだ颯爽たる青年の佇まいを想わせた。

直太も一年生のあいだは、職員室や校長室や給食室もある南校舎の一階に教室があった。上の二階と理科室・音楽室のある三階には、姉の美奈子がいた三年生と五・六年生の教室があって、そこの南側に張り出したベランダからは運動場とその彼方に広がる風景が一望できた。とくに三階からは、運動場のむこう側の端にある忠霊塔や相撲場のさらにむこう側に、京町や辻町の商店街のほうへと連なる家々の屋根が幾つも幾つも重なり合ってみえた。その三階のもう一つ上には、周囲を高い鉄柵に囲まれた屋上空間が広がっていた。もちろんそこからは三階より遠くまで見渡せたが、ふだんは生徒が勝手に登れぬよう階段の上にある鉄扉が閉め切られていた。それでも入学直後の校内見学の折には、新担任となった古賀朋美先生に案内されて一度だけ登らせてもらえた。

その際、クラスの連中と鉄扉の外の明るい屋上空間に出た直太の眼は忽ち、学校に隣接するお寺の本堂の、鈍く銀色に光る大屋根の威容に吸い寄せられた。運動場の縁の塀際に佇むポプラ並木と、墓地のむこう側に聳える本堂を裏側から、ふだんとは違って高い視点からみるせいか、屋根の巨大さがとくに際立って直太の眼に飛び込んで来たのだ。その大屋根の形は、下の方ではいかにもゆったりと悠揚迫らぬ感じで裾野が広がり、甍の上に寝そべって昼寝がしてみたくなるような柔和な表情をしていた。が、頂上部へと向かって登ってゆくにつれ様相が一変し、勾配がどんどんきつくなって急峻の度を増し、天辺では幅が極端に狭まって尖ったようになり、棟瓦の両端には尾っぽを天に向けて反った一対の鯱鉾が睨みを利かせている。つまり、その屋根をよじ登って行く者は、

最初のうちこそ遊山気分で軽々と登って行けても、途中から急に勾配がきつくなり足が滑って難渋し始め、天辺の鯱鉾が指呼の間にみえだす頃には、屋根自体が頭上から反りくり返って来て、撥ね返されたら後ろへ転落する危険に脅かされて、のるかそるかの冒険を強いられそうだった。

その大屋根の威容が直太に、高く聳えて天辺は踏破し難いのに、だからこそよじ登りたくなる峻険な山を連想させた。実際、一階の教室や運動場からだと見上げてもよくみえなかった、非常に堂々とした雄大な姿が、それをその屋上からみた直太の眼と心には鮮烈に焼き付けられた。直太は、未だ絵や写真でしかみたことの無い本物の富士山とかではなく、そのお寺の本堂の大屋根を頂上めざして登って行く時の自分を、その時に味わうであろう気分とともに勝手に想像して、その想像を弄んでいた。その想像の裡には、転落の危険も脅威となって含まれ、物に感じやすいぶん怖がりな直太を慄かせたが、それも冒険には付き物のスリルとサスペンス。この幼き夢想家はふだんから、実にたわいもない事にも興を感じて夢見がちで、本物の霊峰なんかよりもその大屋根を登って行く自分を、冒険に挑む痛快な心持ちとともに夢想していた。するとそのうち、自分はいつかそのお寺の大屋根の天辺まで、是非ともよじ登ってみたい、否、登らねばならぬ、否、きっと登ってみせるとの確信すら湧いてきたのだから、不思議だ。

そんなふうにとりとめもない妄想に取り憑かれていたところへ突然、朋美先生が、「夕ぅ～焼け小焼けで日が暮れてェ～」と伸びやかに声を張って歌いだした。不意を突かれた直太は、びっくりすると同時に忽ち現実に引き戻され、つぶらな眼（まなこ）をよけい真ん丸くして、先生のほうを振り返った。もとより朋美先生には、ぼさすけの直太を脅かしてやろうなどというつもりも無く、ただ、「やぁ～ま（山）のお寺の鐘が鳴るゥ～ちゅうて、毎日夕方五時になると音楽の流るっでしょうが。火事やら何やらの時にゃ、ウーウーウーちゅうてサイレンも聞こゆッ。あげな音もじぇんぶ（全部）、ここン屋上から鳴り響いて行ったって、街ぢゅうどこに居ったっちゃ音の届くごつなっとっとですよ」それらの音源もそこの屋上にある旨を、なんだか誇らしげに説明していた。

以来、『夕焼け小焼け』のしみじみとした郷愁の中にそこはかとない哀感がにじむメロディーを聴くと、直太は、その涼泉寺というお寺の本堂の堂々たる大屋根の雄姿を、そこの甍に取りついて必死に頂上めざして登って行く自分自身という者の空想をも交えて、想い起こすこととなった。

とにかく、未だ落成して長くは経たぬ近現代的な鉄筋コンクリート三階建ての南校舎は、子供たちが歩んでゆくその前途に光輝あらんことを予祝する象徴であるかのように、陽光を燦々と浴びて建っていた。

そんな南校舎が溌剌たる若者なら一方の、北校舎、その古色蒼然たる物寂びた木造二階建ての旧校舎は、それを未だ直太の知らぬ言葉で表現するなら、

――老骨。

そう呼ぶのがいかにも似つかわしかった。蔓という古風な呼び名が似合う瓦ぶきの屋根を頂き、南校舎の陰に隠れるようにして建っていた。南校舎が精気の横溢した若者なら、こちらは老いさらばえた翁の爺様だ。元号が昭和になるずっと以前からすでにそこに建っていて、ゆうに半世紀やそこらは現役の校舎として年々歳々、子供たちを迎え入れては送り出してきた。その間、風雨と陽ざしに年がら年ぢゅう晒され続けてきた外壁は、木の板そのものが脱色されたように鈍く色褪せているのはもちろん、表面には縮緬皺を想わせる細かな凹凸が刻まれていた。それは木の繊維の軟らかい部分だけが収縮して後退したぶん、硬い年輪の筋ばかりが浮き出たようになり、木目が繊細かつ微妙な小波文様を成しているのだった。それは、寄る年波とともに刻まれた皮膚の皺のような外観と感触を呈していた。

そんな北校舎には二年生と四年生の教室があって、六年間のうち合わせて二年間だけは必ず、この老朽化した校舎で過ごさねばならなかった。それで直太たちも、新二年生として迎えた第一日目の始業式の日にはさっそく、南校舎からの引っ越しをせねばならなかった。せっかく陽あたり良好で明るい南校舎に教室があったのに、その南校舎に陽光を遮られるせいで昼間でも薄暗く、いかにも陰気な感じのする、経年劣化のすすんだ北校舎へと、各自が自分の道具類を携えて、ぞろぞろぞろぞろと渡り廊下を北へと移動して行った。

その渡り廊下が途中からは、二つの校舎の間にあるドブと化した掘割、その上に架かる橋の役割をも兼ねていた。その橋になった部分の左右両側には、子供らが下履き用と上履き用の靴を履き替える下駄箱の棚があって、北校舎の入り口に向かって右側が二年生用、左側が四年生用に分かれていた。直太たちの担任は一年時にひきつづき古賀朋美先生だったので、朋美先生から、これからは二年生の側にある三組の、下に自分の名前札が貼ってあるところを使うようにといわれた。

その履物を収納する棚の上には、いちおうの壁らしきベニヤ板さえも張ってはなく、つまり吹きさらしの状態だったので、下からはドブ川特有の硫黄に似た悪臭が容赦無く漂って来て鼻孔を刺激した。

その棚の所定の位置に各自の下履き用の靴を収納した辺りから、直太らは、自分たちがこれから一年間を過ごす北校舎の古び様を、改めて今一度、それ迄にも増して強烈に意識させられた。保健室が北校舎の中でも北の端にあったので、一年生の間だって立ち入った経験がまったく無くもなかった。だが今日から、学校で過ごす時間のうちの大半をこの北校舎にある教室で過ごすのかとおもうと、南校舎からの落差というか、子供でもほとんど落魄感が身に迫った。「うわいたア〜、ボロかねーッ！」「気色ン悪さア〜！　こら、お化けンず（出）っとやなかね？　ひゅう、どろどろどろどろどろォ〜、うらめしやァ〜ちゅうて」「うん、じぇったいずっくさ（絶対出るさ）！　なんさまお化け屋敷の、妖怪館やけんね

ェ。北校舎は、呪いの館！」子供たちは、身も蓋も無いほど歯に衣着せず正直に、自分らの抱く印象を口々にいい合った。

たしかに、その渡り廊下を通って校舎内に入って行く手前の、ちょうどドブの上にさしかかった辺りからしてすでに、一種異様な空気、瘴気とでもいったものが立ち込め、躰にまとわり付いて来る感じがした。

そうした印象をかたちづくる主な要因といえばやはりドブ川、渡り廊下の下をかすかに流れる、その水路にあった。水底に堆積したヘドロの表面に見え隠れする雑多なゴミの存在と、その上にほとんど澱んでいる腐ったような水。それらは、「水郷」と呼ばれたこの鄙びた小さな城下町の名を汚す、まさに恥部だった。

街ぢゅうを巡る掘割の水が、市街地を中心に急激な汚濁がすすんで、いまやドブと化しているその実態は、当然、子供たちの意識にも反映されていた。たとえば、直太たちが通う小学校の校歌は冒頭部を、「水の街ィ～」と誇らかに歌いだすのだった。だが、そこをあえて「ドブの街イ～」と、皮肉と自虐と自嘲を込めた替え歌にして、ヤケクソ気味に声張りあげて歌いだす習慣が、彼らのあいだに定着していた。

彼らより一代前の親たち世代は、掘割から汲み上げた水をそのまま生活用水として炊事・洗濯等に利用したものだとか、掘割に跳び込んで水遊びしながら泳ぎをおぼえたとか、清流にのみ棲息する手長海老を掘割で捕まえては食べたなどといっては、彼らの子供時代を懐かしんだ。しかし、そんな想い出話なんかを、直太たち世代が今更ながらに聞かされたとて、それはまだ掘割に河童が棲んでいて、人間相手に悪ふざけしたり、その廉で懲らしめられて償ったりの交渉を繰り返していた、遠き時代の昔話を聴く、浮世離れしたメルヘン感覚にちかかった。彼らが当時目の当たりにしていたのは、水郷のシンボルたる掘割がまさに死に瀕している、高度成長の陰画ともいうべき様相だったのだから。各家庭から合成洗剤でブクブク泡立つ生活排水が無遠慮に流し込まれる。投棄されたプラスチック製品などの雑多なゴミが積もり積もって水流をせき止める。汚水が忽ち腐って土壌にしみ込む。やがて水底には黒々としたヘドロが分厚く堆積し、その上に汚らしく黒ずんだ汚水が溜まって澱んで、もはや掘割というよりも、

――ドブ。

それが至当の呼び名となっていた。その汚くて臭い物の典型例と化したドブと間近く接する機会が多いのは、「忙しか忙しか忙しかァ～」と年がら年ぢゅう多忙にかまけている大人たちよりも、むしろ直太たちのような子供らだった。

時折、メタンガスの泡が、ごぼっ、ごぼごぼごぼっ、と音たてて浮き上がって来る、汚穢地獄さながらのドブに、誤ってボールなんか落とそうものなら、サア後が大変だった。棒切れの先で手元に手繰り寄せてみたり、長い柄のついた網で掬ったりして救出できたとしても、ドブ独特のヘドロ臭さは、一度付着すると洗っても洗っても離れず、乾いてからもうっすらと臭った。だが多少臭うくらいならまだしも、蛮勇を奮

い起こして裸足で取りに入って行った子供が、それこそ命に関わる危難に遭遇した話もきこえて来た。
ドブ泥の中にはゴミとしての、割れた茶碗だの土瓶だの一升瓶だのビール瓶だの板ガラスだのも投げ込まれ、尖った破片が鋭利な凶器と化して埋もれていたのだ。
その子供は、運悪くそうした破片を素足で踏み抜き、激痛のあまり跳び上がった。足の裏に破片が突き刺さって怪我をしたこともさる事ながら、さらに厄介な事に、そこはバイ菌の巣窟のようなドブだった。案の定、子供の足の裏の皮膚を傷つけた破片にも、毒性の強いバイ菌がしこたま付着していたらしく、とくに破傷風菌が傷口から侵入したものと推測された。果たしてその子供は傷口が膿んで、怪我をしたほうの片足全体が赤紫に変色して腫れ上がり、高熱を発して人事不省に陥りかけた。担ぎ込まれた病院で、医者は、放置すれば致命的な厄介事にまで立ち至りそうな容態を診て取り、そのままだと腐って切断に至りかねぬ足の傷口を改めて切開し、汚れた血や膿を入念に除去する施術を行った。そうして傷口の丹念なる洗浄に努める一方で、血清やら抗生物質やらを注射して毒消しにも注力した。その結果、それ以上容態が悪化することはかろうじて喰い止められ、幸い足の切断も免れた、という話だった。
こうした危険な出来事も、直太たちの周囲でたまに起こる度に注意喚起が行われ、子供ばかりか子を持つ親の心胆をも寒からしめた。
それが、この街に暮らす人々に恵みを垂れ、「掘割にゃ昔から、水ン神様の棲んどらっしゃる。そりぃけん掘割ン水ば汚しょんなら、神罰の当たるばい。岸から小便どんまりょんなら（放尿でもしようものなら）、ちんぽの腫るったいッ」と、感謝と崇敬と畏怖の対象とされてきた掘割の、祖先から受け継いだ郷土のシンボルの、成れの果て――。
そんなドブの上を跨ぐ渡り廊下を通って北校舎に入って行くとき、直太の脳裡を掠めたのは他でもない、
――三途の川。
浄土宗のお寺が営む幼稚園でみた地獄極楽図や六道図など、亡者たちが死後の世界で道中行脚する様を描いた想像図には必ず、この世とあの世との境域を画する三途の川が描き込まれていた。その川には橋が架かっていない代わりに、渡し舟に乗せられ運ばれて行った先の対岸には、閻魔大王の居る閻魔庁。そこは亡者たちを生前の所業によってさばく裁判所で、大王が下す判決次第で極楽往生が叶う果報者もいれば、逆に、地獄へと追い落とされ、鬼や牛頭馬頭といった恐ろしげな獄卒連中からの残酷な責め苦に苛まれ、苦しみ悶えて泣き叫ぶあわれな因果者たちの姿も活写されていた。そして、それらの絵図の主題はむしろ後者にこそ置かれ、地獄の責め苦の豊富なる諸相と、その一々の惨たらしさがコレデモカとばかり、スペクタクル（見せ物）的にどぎつく描き込まれていた。
そんな地獄図の類を、やっと物心つきはじめる幼児期にみた直太の想像力が、そこにあるドブ川をまずは三途の川に見

立てたのだ。つづいて、それを渡ったむこう岸の北校舎は、当然、死後の世界だ。そこは苛酷な責め苦の待ち受ける地獄、ではまさかあるまいとおもう半面、極楽ほどお気楽に過ごせるわけでもなさそうな、一種異様な感じの「異界」として、直太の前に立ち現れたのだった。

【二】

学年が一つ上がったことに伴って、身の周りでは校舎・教室ともたしかに激変した。

しかしクラスメイトの顔触れも、担任が古賀朋美という太っちょのおばちゃん先生なのも、一年生の時と変わらなかった。クラスとしては、新たに一名の転入生を迎え入れはしたものの、その斧柄浩太郎という男の子は、いかにも引っ込み思案らしく、おとなしい生徒だった。したがって、彼が加わったことによってクラスの雰囲気が大きく変わるなどということは無かった。

それにあと一つ付け加えるとしたら、校舎自体は南から北に変われど、一階に直太がいる教室があって、おなじ校舎の二階には姉の美奈子がいる位置関係も、直太が一年生だった頃とおなじ状況が維持された。つまり、直太のいるクラスが南校舎の一階から北校舎の一階の教室へと移動して来たように、四年生に上がった姉のクラスも、南校舎の二階から北校舎の二階へと移動して来たのだった。たったそれだけの事だが、北校舎は南校舎よりも狭くて、そこに出入りする児童数も減ったがために、姉と遭遇する機会は逆に増えてしまった。その事は直太にとって、災難を意味した。姉美奈子の、怜悧で勝気で口が達者なことは、ほぼそのまま直太には厄介な、彼女の意地の悪さとして感じられることも多かったから。

しかし、迷惑なのはお互いさま。

美奈子にとって直太は、幼稚で愚図で不器用で、何をさせても拙劣で粗雑で怠惰な、つまり何をさせても駄目な弟であるため、なにかと尻拭いする機会が廻って来て随分と世話が焼けた。そのくせイイ気なもんで、すぐ調子に乗って人眼を憚らずふざけるので、まったくこのお調子者と来たら……。身内の、姉たる美奈子からすると、実に恥ずかしく不名誉で腹立たしく、お座に出せぬとはこういう奴の事をいうのだった。そんな恥知らずとも映る弟をみているだけで、神経を逆撫でどころか掻き毟られ、苛立ちがつのるあまりつい、「直太、あんたが悪かとよ！　あんたがちゃんと考えて、恥ずかしゅうなかごつ行動せんとが出来んとやろが！　せからしかア、もう好か～んッ！」ヒステリックにガミガミと口うるさくいわずにはいられなかった。

ある日も美奈子は帰宅するなり直太を捕まえ、「あんた、今日でん学校で何ば為ょっとかやん、掃除ン時間に？　一階の水道ンところで馬鹿ンごつ、友達とワアワアギャアギャアいうて騒ぎょって、通りがかった橋本先生に、『こらぁッ、掃除ばサボってにやがりょっとは（ふざけてるのは）誰ぃか！』ちゅうて怒られよったろがッ。あんたがひとっ（一人）

で恥掻くとは勝手ばってん、ねえちゃんにまで恥掻かすんなやんッ！」

水道はまったくおなじ造りのが、一階の昇り口と二階の降り口とも、それぞれ階段の向かい側に、廊下のおなじ位置に据え付けてあった。その日の掃除の時間中、直太は流し台の上に蛇口が並んでいるそこへと、汚れた水の入ったバケツを提げて水替えをしに行った。そこ迄はよかったが、おなじクラスの仲間が用も無いくせにのこのことついて来て、何かとふざけかかって直太をからかうので、バケツの水替えという用向きは忘れ、いっしょになってふざけ始めた。水しぶきをかけ合うなどし、日吉神社で飼われている猿たちが興奮したときみたいにキャッキャ、キャッキャいってバカ騒ぎに興じていた。そこへ、運悪く姉の美奈子が友達数人と連れ立って通りがかり、事の一部始終を目撃することとなったのだった。

美奈子は逸早く直太に気づいたので、見ないふりで素通りし、そのまま階段を昇って行こうとした。しかし、彼女の友達が目ざとく直太に眼を留め、

「ほら、美奈ちゃん、あすけ（あそこに）居っとは直ちゃんじゃなかね？　あンぽちゃっち太えた男ン児の、ええらしかつぁ（可愛らしい子は）直ちゃんやろ？　ほぉら、やっぱし直ちゃんやん！」

直太は相変わらず、同級の低学年児の間でもひときわ幼げで、顔つきも乳くさかった。躰つきはころころと肉づきよく太っていて、動き廻る様が仔犬か仔熊みたいで愛くるしい。そんな直太を見かける度に、美奈子の友達はこぞって嬌声をあげて騒ぐのだったが、その日も、「ホラ見てん（見てごらん）、直ちゃんの、何のおもしかつか（何がおもしろいのか）あげぇん水しぶきば撥ね飛ばして、にやがりょんなはる（ふざけておいでだ）！」

同行の仲良し二人がわざわざ足を止めてまで、直太に眺め入っているものだから、美奈子だけ一人さっさと階段を昇って行くわけにもゆかず、しょうことなしにみていた。だがすぐに、バカバカしさに飽くという以上に恥ずかしさが先に立って、階段を昇りかけた。

すると、その時、

「こらッ、おまえたちゃ掃除時間中に何ば為ょっとか！」

その声におもわず振り返ると、案の定、一人の男性教師にその放埒ぶりを見咎められた直太と仲間たちが、叱られて青菜に塩といった感じで、忽ち項垂れる姿が目に入った。声の主は、橋本大作先生。その年の春の人事異動で転任して来たばかりで、直太たちとおなじ二年生でも他のクラスを受け持っていた。彼は、持ち前の声量を発揮して直太たち「にやがりもん（ふざけん坊）」をまずは、がつんッ、と一喝しておいて、その迫力に縮み上がった彼らのほうへと歩み寄って来ると、

「わがどんな（おまえたちは）掃除はサボって、にやがって（ふざけて）水遊びてろん為ょったごつして、そげな事っで良かぐれえおもよっとかね（そんな事でいいとでもおもって

いるのかね）、うん？」と、直太たち一人一人の顔を正面から、じッ、と睨むようにしてみていった。
　仲間たちはいかにも極まり悪そうに頸を竦め、黙り込んで、互いの顔をチラチラと見交わしている。だが直太は、あまり悪怯れた様子もなく、ただ訊かれた事に答えるのだといった風情の、大きな声で、
「出来（でけ）んです！」
　それをきいて、橋本大作先生は「そうやろもん」といって首肯くと、
「よし、そんならおまえたち全員、自分のクラスと名前ばいえ、早よいうてみん！」と直太たち三人に命じた。
　周りからは物見高い野次馬連中が、その場で忽然と幕が上がったひと幕ものの寸劇、即興劇の模様を、遠巻きに見物している。そんな中、仲間たちは恐縮のうえにも困惑して顔を見合わせ、互いにもじもじしている。直太はというと、橋本先生の顔を黙ったまま、ただ物珍しそうに見つめている。そんな彼らに先生は、
「怒られて名前ばいわさるっとよりか、掃除ン時間に作業ば怠けてどうろこうろ為ょったつが（いいかげんな行動をしていたのが）、もっと恥ずかしかろもん？」そんなふうにいってから、焦れたように再び、「さあ、早よ自分の名前ばいわんかて！」それでも黙ったままの直太たちに苛立ったように、「自分の名前もいえんごたる恥ずかしか事ば、おまえどんな為ょったつぞ。そげな、為ちゃ出来ん事ば為ょったつやけん反省して、もう二度と今日みたいな事はしませんち誓わやんめえもん（誓わなくてはなるまいよ）、自分の名前ば名乗ってから。そげんおもわんや？」
　そういい終わるか終わらぬかのうちに突然、また直太が、
「郷原直太です――」
　さっきの「出来んです」にも増して大声で名乗った。たしかに橋本先生から所属クラスと氏名を尋ねられ、その催促に対しての応答だとしても、唐突感があった。その間の取り方がずれていて独特で、直太らしい、といえば、らしかった。
　一方の橋本先生は虚を突かれたらしく、一瞬、ちょっと驚いた様子でまじまじと、直太の真面目くさった顔を見まもっていた。が、急に相好を崩すと破顔一笑して、
「ほお、直太くんちゅうとか、君は？」直太が「はいッ」と返事をすると、「元気者やねえ」と感心したようにいって、さっき迄のこわもてな感じとは打って変わった、やさしい口調で後を続けた。「元気かつぁ大いに結構ばってん、ちょっと考えてみろ。おまえたちが怠けとる間も、真面目に為ょる者な、ちゃんと掃除ば為ょるわけよ。だけんくさ、そン人たちに悪かねえち、迷惑かけて気の毒かねえち、そげんおもわんや、おもうやろ？」と諭すのだった。
　直太はすぐに、同じクラスの女子で幼稚園からいっしょの、チサちゃんこと神崎智佐子の顔を想い浮かべた。智佐子は、真面目で親切で心がきれいな子だ。だから、怠け者の直太自身も含めた他の連中みたいに、ズルしたりサボったりなんか

しない。そんな智佐子のことが想い浮かぶと、自分は、マアなんと駄目な、心無いつまらぬことをしたんだろうとおもえてきて、妙に沁々と悲しくなった。そんなふうに、直太は直太なりに反省しているところへ、

「オイ直太君よ、ぬしゃ（おまえは）そげんおもわんか？」と橋本先生が名指しで訊いて来たので、直太は今度こそドンピシャの問合で、

「はい、善か人に迷惑ばかくっと出来んです！」打てば響くように答えた。

すると先生は、直太の返事がお気に召したらしく、腹の底から機嫌好く笑ったときの彼の特徴で、目を眠ったように細くしてうんうんと二度三度首肯いてみせた。

橋本大作先生は、当時まだ三十代前半くらいの壮漢で、合体（がったい、ではなく、ひと学年丸ごと全クラスが参加する「合同体育」の略だから、ごうたい、と読む）の時間など、直太たち子供が喜びそうなおもしろい冗談も適度に交えては、場を盛り上げたり和ませたりしてくれる、朗らかで温厚な大人だった。しかし、生徒たちが集中力を欠いてだらだらしたり、とくに怪我につながりそうな不真面目な取り組み方をする者がいると、真剣味が足りぬといって叱った。この先生に本気で叱られると、身が縮むほど怖かった。だからその日だって、すっかり有頂天になってふざけていた直太なんか、一喝された時点で落雷にでも撃たれたように竦み上がって、小っちゃくて丸っこい躰が棒でも呑んだように、こわばり切っていたのだった。

そんなふうに怒ると怖い橋本先生は、直太たちに彼らのした事の非を悟らせ反省を促すと、総仕上げとして一人一人の頭に拳骨を落とした。ただし、こつんッ、こつんッ、こつんッ、と手加減してごく軽く。それでも直太は、その大して痛くもない拳骨に償いと赦しの意味を感じ取って、むしろ爽快な気分を味わった。かくしてその一件は、直太の中では後腐れ無く済んだつもりで、すでに忘れかけていたのだった。

ところが、まさか下校して帰って来た姉によって蒸し返されようとは！　だいたい、姉が後になってゴチャゴチャいって来そうなときというのは、直太の脳裡を災難の予感がよぎる。こうした時の姉と来たら、実に執念深くて、執拗な上にもしつっこいのだ。

姉の美奈子にとって、その一件は未だ終わってなどいなかった。事の一部始終を目撃していた当時、いっしょに居た友達は小声で、「あらッ、先生に見つかったァ！」とか、「ほらッ、あげん怒られてから！」とか、「名前までみんなの前でいわされたとに、あげん拳骨でくらされた（殴られた）ごつして、くぅ～むぞかァ～（とてもかわいそうだ）！」などと、直太に同情して囁き合っていた。それらを聞かされるにつけても、直太に対する憐憫や同情なんか、美奈子にはこれっぽっちも湧かなかった。むしろ、公衆の面前で、衆人環視の中で恥をさらしている、こんなのが自分の弟だとおもうと情けなくて、自分まで恥ずかしくていたたまれなかった。だ

から、その時の恥辱を引き擦るように下校して来てみると、直太は何事も無かったかのように、いつもどおり暢気に、おもちゃで独り遊びに興じている。それだけでも、もうたいがい業っ腹だというのに、その手荒な、まるで玩具の強度や耐久性を試すかのような遊び様をみていると、大切なリカちゃん人形を直太に壊された忌々しい記憶までが甦って来た。そのリカちゃん人形の一件はもう昨年の事になるが、祖母と二人で叔母の公美子を訪ねて上京し、東京見物をした際に銀座か日本橋のデパートで叔母から買って貰った、貴重な想い出の品だったのだ。それを、そんなふうにして壊されたのだとおもうと、怒りが増幅され、倍増してくるようだった。

「直太、あんた今日、掃除ン時間に橋本先生から怒られよったろうがア、みんな大勢でみとる前でエ。あたしン友達ゃ、華恵ちゃんでん裕美ちゃんでん皆大概、あんたがあたしン弟ち知っとっとやけんね！　そげなあんたが、水道ンところでアホんごつにやがりよるとば（ふざけているところを）橋本先生に見つかってから、バカんごつ怒られよるとば、おねえちゃんな華恵ちゃんと裕美ちゃんといっしょに見とったとやけんねエ。あんたが恥ずかしか事ば為ょっとの誰にでん知らるっと、おねえちゃんまで恥ば掻かやんめえが（恥を掻かねばなるまいが）！」そういって、直太を責めずにはいられぬのだった。

　ところが存外、直太はケロリとしたもんで、ただただうるさそうに、「あアせからっさ（煩い）！　邪魔すんな、あっち行け！　早よあっつぁん（あちらへ）行けやん！」と、蝿でも追っ払うような仕草をした。その様子をみると、姉の苛立ちは、また余計につのった。

「今日でん、ねえちゃんなあんたが所為で、顔から火の噴きず（出）っごたったッ。もう、恥ずかしゅうて恥ずかしゅうして、堪らんやったとばい！　ほんなこて恥やん、こン恥男、郷原家の恥さらしがァ！」

　美奈子は、まだ四年生でも読書家の優等生で、自尊心も人一倍つよく、子供だてらに世間体というものを過剰なくらい気にする自意識過剰タイプの、いわゆる「おしゃまさん」だった。そんな彼女の眼からみた直太は、世間の目というものにあまりにも無頓着で、廉恥心に欠けた恥知らずと映った。その恥を恥ともおもわぬ大胆さが曲者で、郷原家の内々で済むうちはまだいいが、家の外で遠慮会釈も無く野放図にやらかされると、直太の姉という理由だけで美奈子も巻き添えを喰い、自分までが呆れられ嗤われ蔑まれそうで、その事に恐怖心すら抱いていた。ところが、当の直太と来たら蛙の面に水で、ちっとも身に堪えた様子も無い。すると恥辱が、直太がどこ吹く風といった風情でいるその分まで、直太の姉たる自分に加算されて来る気がするのだった。すると、直太の所為で、自分までもが世間の嘲笑に曝されているのだとおもえ、恥辱感に苛まれていたたまれなくなるのだった。「いったい誰ぃが所為でこげな恥ずかしか、あたしまで厭ぁな思いばさせられよるちおもいよっとかねッ！」

だが事実は、実相はというと、他人は他人で自分の事に忙しいのだ。そんなに、美奈子と直太の郷原姉弟にばかり関心を払っていられるほど、閑じゃない。したがって、彼女が直太の所為で恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい……と慙死せぬばかりに感じている、そのうち大半は、自意識過剰に基づく被害妄想が占めていた。しかし、怜悧な彼女も高々まだ小学四年生、己が抱く自意識や妄想を対象化し自覚的に処理できる迄には、まだまだずいぶんと先は長そうだった。

また、姉が苛立つ原因の一端は、彼女が心許す親友である少女らの側にもあった。美奈子の家庭でのお喋りにも、今日は華恵ちゃんがアアした、裕美ちゃんがコウしたと頻繁に登場する少女たちは、学校の内外を問わず直太を眼ざとく見つけるや騒ぎ立てた。「あらァ直ちゃんのええらしさア（愛くるしいこと）！」そういって駆け寄って来ては、赤ん坊か幼児でもあやすように、直太をもてはやした。そして、直太がたわいもなく仲間と悪ふざけに興じる様など、「ねえねえ美奈ちゃん、今さっき直ちゃんに一階の廊下で逢うたらね、そしたら直ちゃんが……」云々と逐一、美奈子にご注進に及んだ。おかげで、直太の「にやがりもん」ぶり、「のぼせもん」の行状が忽ち姉の知るところとなって、彼女を苛立たせ、後でタップリと文句をいわれるのは直太だった。「直太、あんたンごつ下策っか（みっともない）弟の居って、ねえちゃんなもぉう恥ずかしゅうして恥ずかしゅうして堪らんとやけんねえ、あんたっちゅう人間は恥さらしもよかとこたい！」こんなふうに剣突く喰わされると、それは直太にとっても災難なのだった。

姉の美奈子は校内屈指の読書家だ。その所為か、直太を罵倒するときに使用する語彙や言い廻しまでもが――その半分ちかくは、肝腎の直太にとって自分への悪口とわかる程度で、ほとんど意味不明だとしても――豊富で多彩で絢爛豪華だ。直太ごとき、とても太刀打ちできる相手ではない。しかも、口が達者なばかりか、その年齢の子供にしては妙に理屈っぽい。自分の言い分はこうなのだといい始めたらたとえ屁理屈でも、容易には主張を曲げず押し通す。この手のしっかり者の常として、気が強いことは贅言を俟たない。

だから、直太をさんざんにいい負かし泣かせた挙句に、母親の節子とも時々いい争いの口喧嘩になる。そんな時には、ややもすると母親ですら揚げ足を取られ、美奈子の理屈にいい負かされることも珍しくなかった。すると節子が、

「口から先に生まれて来たごたる子の、憎まれ口ばかし叩いてから、ほんに底意地の悪ぅしてから可愛い気ん無さあッ！」

負け惜しみ交じりにいえば、美奈子は対抗してよけい反発を強め、

「ばってん、いつでん最初に迷惑ばかけて、あたしが厭ンなる原因ば作っとは、直太やけんねェ。直太が出来んとやんね、直太が！　人ン事やらいっちょん考えんな（考えずに）、なぁんでん自分の良かぁごつ、好き勝手為っじゃろうがて。直太が為たか放題で、デタラメ為っとが出来んとやん！　そう

やろもん？」下に剛郎というまだ赤ん坊の弟まで生まれていて、美奈子には今迄以上に長女としての、姉としての自覚が求められ、自分はその期待に応えようと献身的に努力している。なのに直太は、相変わらず幼稚で愚図でぼんやりしたまんまの、素の直太でいることを許容、否、歓迎されてすらいるように見受けられる。

――こげな不公平の罷り通って良かわけのあろうもんかね！

当然、美奈子の不満は直太に対するそれだけでは済まなくなって、「おかあさんなあたしに、底意地の悪かの可愛げが無かのちいうばってん、そげなふうにあたしば産んだつぁ、おかあさんやけんね！　おまけに、いっつも直太にばかし依怙贔屓して、あたしが悪かごついうやんね（わたしが悪いようにいうじゃないの）。直太の為ょる事ば、直太がどげな事ば為ょっとか、ようとわかってからいうて欲しかよ！　直太はねぇ、学校で馬鹿ンごたる事ばかし為て、ばってんバカやけん恥知らずで平ぇー気でおるとよォ。そのぶんの恥は、あたしが掻かされよっとやけんねェ！」ざっとこんな具合だ。

とにかく、彼女が理屈を楯に抗弁しはじめたら、相手は子供だからと油断してかかると、大人でもいい負かされた。節子もつい感情的になるが、論戦っぽくなると感情的になった側が負けなのだった。だから、美奈子の言い草に苛立つ節子が、「あア、せからしか！　ホラみてごらん、また憎まれ口ばかし叩こうが！　もう良か。あんたといい争うたっちゃ不愉快になるだけで、切りの無か。そげなふうやけん、口から生まれて来たごたる子の、底意地の悪ぅして可愛げも愛嬌も無かち、そげんいわるっとたいッ！」

こうしてみると、直太が家庭内での不和の原因もつくっていると、そうみえなくもない。が、それはともかく、口喧嘩なら母親の節子でもいい負かす姉美奈子の舌鋒にかかっては、直太なんかなおさら敵じゃない。そこで最近、直太が美奈子の舌鋒をまともには受けとめず、てきとうに受け流す方法はといえば、

――突然バカになる。

この一手あるのみだった。「そげな事ぁ知らぁ～ん、何ばいいよっとかわからぁ～ん、あんたやら知らぁ～ん」わざと白眼を剥き、鼻の下をひん伸ばして、思いっ切り馬鹿げた、みっともない顔をして、「誰ィかわからぁ～ん、そげな事ぁ知らぁ～ん、もう何もわからぁ～ん」。後はもうこの調子、馬鹿の一つ憶えで「知らぁ～ん、わからぁ～ん、知らぁ～ん、わからぁ～ん、知らぁ～ん、わからぁ～ん……」と、本物のバカになった体で繰り返すのみ。どこで会得したか知らぬが、自分がまずバカになり切ることによって、相手を小馬鹿にして悔しがらせるという、高等戦術に打って出た。

当然、姉は怒り狂って、

「こんバカのアホの、白痴で低能児でクルクルパーの、頭は帽子ば被るための物で、雑念ば払うたら気ば失う奴の、アンポンタンの川流れがアッ！」云々と、その手の知る限りの罵

詈雑言を駆使して罵倒するものの、バカと罵られようがアホと貶められようが、自分から痴呆にでも狂人にでもなり切ってしまおうという、直太相手には通用しない。むしろ、姉がムキになればなるほど術中にはまり込み、彼女にまで直太のバカが伝染しそうで、そのうち厭気がさし、うんざりして、「あんたンごたるバカば相手にしとる暇やら無かッ！　ふんッ、なんが『知らぁ～ん、わからぁ～ん』か。いつまっでんひとっでいいよけ（いつ迄でも一人でいってろ）、こン低能児の出来損ないがッ！」捨て台詞を吐き、暖簾に腕押しの相手の前からの撤退を余儀なくされる。もとより、姉のようにとことん口うるさくて、いい争ったって勝ち目が無い相手には、まともに相手にならぬに限る。それが最も賢明で、かつ最善の対処法であることを、理屈より体験を通して学んだ直太だった――。

【三】

　何はさて措き、北校舎の古び具合たるや尋常ではなかった。今なお現役の校舎として機能しながら、老朽建造物としての蒼古たる風格を漂わせていた。もちろんその内部も外観を裏切らなかった。たしかに、南側に建つ鉄筋コンクリート三階建ての、新校舎に陽ざしを遮られた所為もある。だがその分を割り引いてもやはり、その校舎内には、真っ昼間でも薄暗く陰鬱な雰囲気が漂っていた。そこで見て嗅いで触れて知覚される全てに、過去という時間が物質化して降り積もった堆積物か沈澱物を想わせる陰翳が、埃っぽく染みついていた。

　内装は、上の天井近くが、かつてはもっと白かったのが今や煤けたような漆喰壁で、それ以外は木の板壁だった。そしてその板壁も、木材がそこに歳月を経ること幾星霜――。その間ここを学び舎としてきた子供らの汗と脂と時に涙と他諸々、彼らの肉体はもちろん、霊魂からも分泌された物質が埃と混じり合って木の表面に付着し、繊維の隙間に染み入って徐々に徐々に変色させていった結果が、現在のくすみを帯びた飴色なのだった。そんな垢染みた壁によって外光から遮断された校舎内で、そこに澱んだ空気を呼吸しながら過ごすのは、負け戦から二十年ちかくが経って、もはや戦後ではないといわれた、高度成長の完成期に生まれた子供たち。彼らは、慣れないうちは特にその場所の雰囲気を、生理的に気味悪がった。「うわア、薄暗うして気色ン悪さア～！」「お化けンごたっとの棲みついとっとやなか？」「棲みついとって、ときどき出て来っとやなかね？」「そげんいうなやん、これから毎日、こン北校舎で勉強せやんとぜェ（勉強しなくてはならぬのだぜ）！」「ばってん、ほんなこてお化けの出て来んなら、どげん為ッ（どうする）？」彼らは、そこに幽霊や物の怪といった陰鬱なる霊魂、妖怪や魔物といった超自然的な存在の気配を感じとって、慄いた。

　そうした気配は、たまに亡き祖父文蔵が間近に居る気配を感じてきた、直太にも自然と伝わった。直太の童心にも何かしら、そこはかとなく感じ入るものがあって、幼稚園児の頃

からの仲良しで一年生から同じクラスだった、チサちゃんこと神﨑智佐子とのお喋りの中でも、話題がそちらへと及ぶと、「もし他にだぁれ（誰）も居らんな、チサちゃんだけひとっ（一人）で居っときに、お化けの、ひゅ～うッ、ち寄って来たら、どげん為ッ？」直太が深い考えも無く、こういったものだった。自身もじゅうぶん怖がり屋の直太が、ただ興味を感じるまま軽い気持ちで訊いたのだった。だが智佐子は、俄かに顔色を変えて、

「ちょっと、ねえ、直ちゃん、厭ばい、そげん、お化けの寄って来るやら！　そげな事いうたら、えすぅなるやんね（怖くなるじゃないの）。脅かさんでよ、好かんッ！」ほんとうに怯えながら、いかにも柔らかそうな手で直太の丸い肩口を、ぺちっ、とたたいた。

　智佐子は色白の、愛くるしい顔立ちをした器量よし。小柄な躰がきびきびと活発に動いて、駆けっこもけっこう速いが、直太とは違って頭の回転も速い。算数の計算問題なんかもかるく直太の倍くらいは迅速に解け、しかも正確だ。愚図の直太なんか、いつも感心している。そんな頭の良さ、利発で活発なところだけみていると、姉の美奈子と似ていなくもない。が、「チサちゃんの気のやぁさしかとこりぃが、ねえちゃんやらとはじぇんじぇん（全然）違うもんねェ！」それは天と地ほどの決定的違いなのだと、直太はおもう。

　そういう直太自身は、自分が他人からどう見られているかには、ほとんど無頓着だった。父親の誠人なんか直太が小学校に上がった途端、ブンブリョウドウ、ブンブリョウドウ、ブンブリョウドウ……と呪文のように口を酸っぱくしていい始めた。だが直太は、勉強はどの科目でも、運動はどの種目でも揃って、パッとしない。だから興味が持てず、興味が持てぬから、よけいにパッとしない。

　とくに勉強はすぐに集中力を欠いて、授業中でも、ぼけぇーーーっ、とつい物想いに耽ってしまうことがよくあった。その心の隙を突くように、担任の古賀朋美先生から出された質問に、直太が答えるように指名されても、自分が当てられたと気づく迄にまず間があって、「はッ！」と我に返って起立しても依然、ぼさぁーーーっ、と立ち往生しているか、当てずっぽうでトンチンカンな答えを返し、みんなに笑われるか。その挙句、さすがに恥ずかしい思いをするのがオチだった。それを朋美先生が、直太は生まれつき頭が悪いのだ、ただ単純にボンクラな子供なのだ、と素直に受け取ってくれたら、話は早い。それを、「注意散漫」などと連絡簿に書いてくれた所為で、父誠人が張り切ってしまって、「日曜日の午前中は、とうちゃんが勉強ばみてやるけん、教科書ば持って二階に上がって来い！」つらい勉強の特訓が始まった。

　これが、さすがの直太でも気の散り様が無い一対一のスパルタ式で、直太には何より身に堪える苦行となった。誠人は高校の国語教師だから、漢字の書き取りはしょっちゅうさせられた。そして直太の物憶えが悪くて、小学校低学年の初歩的な文字も書けなかったりすると、大きな大人の男の掌や三

十センチ物差しが、頭上から、ぴしゃんッ、と落ちて来る。その猛特訓が、直太は厭で厭で厭で堪らず、始まると必ず一度は泣いた。すると、書き取りに使う裏紙が涙で濡れて、すっかりふやけて鉛筆で文字が書けなくなる。だが、そのくらいでは到底許してはもらえず、直太は、己が物憶えの悪さ、つまりは頭の悪さが情けなくて泣く、というよりは、ただもう強制的に勉強させられるのが厭さに、泣くのは弱虫の証拠だとわかっちゃいるが、泣けて泣けてしょうがなかった。

とにかくそんなだから、一年生の時の成績なんか、優等生で通っている姉の美奈子とは比べものにならぬほど見劣りする、てんで物足らぬ為体に終わっていた。

そのくせ、独りでするおもちゃ遊びに関しては、祖母久代が、「おろ善かつにどん（悪い物の怪にでも）取ッ憑かれとらんなら良かばってん」と、その様をみて薄気味悪がるほど、極度の集中力を発揮した。そんならその集中力のたとえ半分でも、学課の勉強に振り向けたらよさそうなものを、興味の無い事にはすぐ飽きる。両親、とくに父誠人が「直太ンごつ、飽きっぽうして自分に甘か奴ぁ、おらんッ！」と太鼓判を押すくらい、意地も根性も無い。この世に生を享け、「祖父（じじ）バカの孫煩悩」といわれた文蔵から物心つく時期に、明けても直太、暮れても直太で蝶よ花よと甘やかされた、筋金入りの甘ったれ。もともと小手先が不器用に生まれついたところに、同学年中では三月生まれの幼さも手伝って、大概の事は仲間たちより習得するのに時間がかかる。それで曲がりなりにも押し通ってきた結果が、要領が悪くて愚図の根性無し。

そんな直太の面倒をよく見てくれたのが、周囲の大人たちから「小さかつに、よう気の利き召すこつ（よく気が利かれること）！」と利発さを褒められる、誰あろう神崎智佐子のチサちゃんだった。彼女は直太に対して、幼稚園時代から意地悪な事なんか何一ついわずに、慰めたり励ましたり時には褒めたりして、親切に世話を焼いてくれた。いじめっ子にやられてシクシク泣いていると、涙を拭うよう好い香りのする自分のハンカチを差し出し、時には手ずから拭いてくれた。そりゃあ姉の美奈子だって、やさしくしてくれるときには、とてもやさしいにはちがいない。通学途中、いきなり道路へ跳び出し車に轢かれかけた直太を、勘が働いたのか姉がランドセルに手を掛け引き戻してくれて、おかげで事無きを得たようなことさえ、一度ならずあった。だが時々恩を売るような事をいうし、だいたいにおいて意地悪なのが頂けない。その点で、やっぱり智佐子のやさしさがいちばん沁みるのだ。

当然、直太は智佐子のことが好き、そりゃあもう大好きだ。

母親も姉も彼女の好ましさは認めていて、「直太ぁ、あんた、チサちゃんば好いとっとやろがァ。ほんなこて可愛かもんねェ。あらッ、顔ば、ぽうっ、ち赤ぅしてから、直太は！」こんなふうにいってからかっては、直太が照れ隠しに、「せからしかッ！」といって怒るのをみておもしろがった。

だが、直太と違ってしっかり者の智佐子にも滅法界、苦手

なものがある。それが、ほんとうはいるのだかいないのだかわからぬ、だのに気にしだすと気に懸かってゾワゾワする、「お化け」らしかった。

「なんね、チサちゃんなお化けがえすぅして（怖くて）好かんちね？」

素直にこっくり首肯いて、直太に向けて来る可憐な瞳が早くも潤みを帯びている。そうなると、そのいたいけな眼差しと表情に接する直太の心も甘やかに、きゅんッ、と締めつけられるようだ。そんな、いかにも可愛いらしい智佐子が学校の教室で、机の天板越しにいうには、

「うちのおにいちゃんがいいよんなった（おっしゃっていた）もん、『小学校のボロ校舎に残って晩ぅなる迄なんか為ょっと、お化けンず（出）っげなぞオ』ち！　ほんなこて見た人もおるとげなよ。直ちゃんのおねえさんも、何かいいよんなはらんやったア？」

うんにゃ、何もいいよらんじゃった。そう言下に否定して、安心させてやればよいものを、逆に、直太は自分の勝手な想いつきを唐突に語りはじめた。

「俺ィがごつ（俺みたいに）算数の苦手か生徒の、残されたっちゃ問題ば解くとに暇要ってから、帰るとのドベッコのビリケツになったとげなァ。ばってん、こりぃでやっと帰らるっち廊下ば歩きょったら、なんじゃい腹の痛ぅなって、うんこばまろうごんなった（排便したくなった）。『帰りょる途中でまりかぶる（為被る、垂れ被る、とも。脱糞すること）ぎっと出来んけん、こン北校舎ン便所な気色ん悪ぅしてほんに厭ばってん、まって（排便して）帰ろう！』ち、そげんおもうたとげなァ」

智佐子は不安げな表情で、黙って真剣にきいている。

「そしたら、陽の沈みかけて薄暗うなった廊下ン先の、そン向こうにみえよる便所ン方から、俺ィどんよりかちいっと小まかくらいの子供の、こっつぁん（こちらへ）ひょこぉ～ひょこ歩いて来ょったとげなたい。こげなもう薄暗うなっとる夕方に、子供がひとっ（一人）で校舎ン中ば歩きょるやら、なんか妙やなァ、厭やなァ、気味ん悪さァちおもうたが、うんこば早よ為ぅごたるやんね、もるっごたるけん（漏れそうなんだから）。知らぁんふりしたまま擦れ違うて、サッサ便所に駆け込むつもりやった。ところがたい、今の今迄まだずうっと離れて遠ぉくに見えとったつの、いっぺん目ば、ぱちッ、ち瞬きする間に、もうぶつかろうで為っごつ（ぶつかりそうなくらい）目の前まで来とったけん、『わッ！』ちゅうて驚いて、危うく糞まりかぶろうでした（脱糞しそうになった）！　そりぃが、え～すか（怖い）声で、『あぁ～そびましょ～お』ちゅうもんやけん、そン子供ン顔ばまともにみたらたい……」

「な、なんね、なんやったとねて？」という智佐子の可愛い顔が緊張でこわばっている。

「姿はまだ子供のままやったばってん顔だけが、もう、ばぁさろ（物凄く）長生きして、爺しゃんか婆しゃんかも分から

んごつ年寄った、皺クチャクチャの隙間に目鼻口の付いとるごたる、とにかく気色ん悪ぁ～るか化け物の、にやぁ～ち笑うたごたったとげなたいッ（笑ったようにみえたそうな）」
「きゃあーッ！」と、ついに智佐子の口から悲鳴がもれた。ただの嬌声ではなく、本気で怖がっているのだ。そんな彼女の様子に、直太はもっと怖がらせてみたくなった。
「そン途端、今の今迄あげんチビじゃった躰の急に、縦横にグングン伸びてからくさい、みるみるうちに太ぉなって、とうとう頭で天井ば突き破ろうで為っごたる大男の化け物の、太ぉか口ば開けたらギザギザ尖った歯の、恐ろしか牙の生えとる、人喰い鬼の大入道に変身したとげなァ。そして、さっきは『あぁ～そびましょ～お』ちゅうたくせに、今度は『見たなア～！』ちゅうたとげなよ。『見たなら喰うぞオ～！』ちゅうて上から押し潰すごつ、のしかかって来たごたるふうで、そン爺婆の区別もつかん恐ろしか顔して脅かして来たつげなァ……」
　直太は自分の顔を精一杯その顔に似せてみせ、まるでその化け物になって、今にも襲いかかって、可愛い智佐子を頭からムシャムシャ食べ始めようとでもするかのように、両手を、両腕をひろげ身ぶり手ぶりを交え演技してみせた。すると智佐子は、「きゃッ、えすかッ（怖いッ）、ネエえすかやんねやん（怖いじゃないのよ）、直ちゃん！」と、ぎゅッと握り締めて揃えた両の拳で顔の下半分を覆い隠すようにし、その陰から涙目をこちらへ向けて来た。彼女の「怖い怖い怖い！」という、それは紛れも無く本心だったろう。が、そこで智佐子が、直太の話を遮るなり、耳をふさいで逃げだすなりしないのは、直太の与太話に好奇心をそそられ、乗って来ている証拠だった。相手がそんな様子をみせると、それがとくに智佐子だと、つい調子に乗って悪ノリしてしまう直太だった。
「そりぃばみた生徒はくさん、『こらしもたァ、ほんなもん（本物）の魔物に出逢うた！』ちおもうて、逃ぐうで為っばってん、あんまりえすかもんやけん（あまりに怖くて）魂消て、足はブルブル顫えて、腰はガクガク抜けたごつなって、逃げたかばってん逃げ切らん。じぇったいじぇつめい、ちゅうやつたい！　そン時、下っ腹の、きゅるるるるるッ、ちゅうて、まろうごんなっとったうんこの、出っぞ出っぞ出っぞッ、ちゅうたごつして鳴ったとげなァ。もうねえ、うんこン出っとの我慢できんな、どんこんなんごつなった（どうにもこうにもならなくなった）とげなよォ！」
「そりぃで、どげんしたとォ？」と、こうなるともはや怖いもの聴きたさで、興味津々の智佐子。即興といえば聞こえはいいが、直太の想いつきと口から出まかせの産物であるデタラメ話に、すっかり聴き入っている。その様子に、直太はいよいよ得意になって、
「くるッ、ちその場で反対向くと、ズボンとパンツば、しゃッ、ちずり下ろして尻ば、しんのす（尻の穴）ばモォーモォー為っごつ化け物の方に向けてから、『ええら、こんクソがッ！　人が糞しげ行きょっとば邪魔しょんなら、俺ァもう知

らんッ。こン糞どん喰らえェーーー！』ちゅうて息張って、ちょうどぱんぱんぱんに腹の張って溜まっとった屁の力も借りて、ぶおぉーーーふッ、ちゅうて思いっ切りぶちかましたとげなァ！」

そこで話は突如として、怪奇から一気に尾籠な方面へ思いっ切り品下がっていったので、智佐子は恐怖とは別の意味で、「きゃッ！」と短く金切り声あげた切り、後は絶句していた。だが俄か講釈師の直太は、彼が即興で語りはじめた話で、ここ一番のサワリにさしかかったものとみえ、椅子の上で浮かせ気味だった尻を弾ませながら身ぶり手ぶりも交えて、いよいよ熱弁を振るうのだった。

「そン時、こげん太ぅか大入道の人喰い鬼の化け物の、こげん腰ば屈めてからくさい、生徒のつば（生徒のを）、『おろぉ～（おやまあ）、チビっちょのつぁ、しんのすでん何でんええらしかねェ（小さい子のは、お尻の穴でも何でも可愛いねェ）！』ちゅうて、おもわず覗き込みよった。そしたら、顔の前のしんのすから発射されたうんこの、ぶおぉーーーふッ、ちゅうて凄か勢いで飛び出して来たろがァ。そして、そン恐ろしか顔の ド真ん中についとる鼻ンにきに美事命中して、巧い事しっちいたァ（ひっついた）！　べぢゃ～ッ、ちなって一度しっちいたら離れん、そン臭か事っちゅうたらもう、天下無敵の臭さやったとげなたいッ！」

すると、いつの間にか集まって来て、直太と智佐子の周囲に輪を成した、他の子供らからも「わあーーーッ！」と歓声が上がって、場がひとしきり沸いた。春とはいえ、朝から桜花散らしの雨が降りつづく肌寒い日の昼休みで、いつもは運動場で外遊びに興じる元気者も、その日ばかりは教室に居た。そんな彼らが聴衆を形成し、直太が智佐子に語りだした、たわいもない即興のデタラメ話を、いつしか耳そばだてて聴いていたのだ。

「これにゃさすがの化け物も、ハア魂消ってからくさん、『うぇ～ッ、うぇうぇうぇうぇうぇ～ッ、臭さァ臭さァ臭さァ！　コラあんた、臭ぅしてのさんばの（臭くて堪らんよ）。何ば喰うたらこげな臭かつば放（ま）っじゃろか、こら堪らんッ、こら敵わんッ！』ちゅうて、ゲロ吐きそうな顔して死にかけとっとげなたい。どげん躰の大きゅうして恐ろしか顔した化け物の怪物の魔物のちゅうたっちゃ、顔面でうんこ爆弾の炸裂してんね（炸裂してごらんよ）。『うぇ～ッ、臭かばい、おえぇ～ッ！　ぬしゃ（おまえは）人間の分際で、なんちゅう無茶苦茶な、滅茶苦茶な事ば為っデタラメか奴かやん。こげなデタラメか奴てろんな、地獄にでん居らん、もう顔見っとでん厭ぁばい、相手し切らん。こけ居っと（ここにいては）、こんだ何さるっかでんわからんけん（今度は何をされるもかわからぬゆえ）、逃ぐっがマシたんもオ！』ちゅうて、ゲロ吐きそうな顔して逃げだして、もう二度と姿ば現さんじゃったとげなたぁ～い。メデタシ、メデタシ、はい、おしまい――」

どっとはらい、というわけだ。

直太が語り終えた途端、周囲に集まった聴衆からは、
「化け物の、人喰い鬼の怪物ば追っ払うとに、うんこば大砲ン砲弾のごつ発射して、そン顔面に命中させたとげなァ！」
「うんこなら臭うして汚かけん威力のあって、化け物退治によう効いたとやろたい！」
「そうたい、うんこ爆弾の炸裂して臭うして汚ぁ～なかとこりぃが、無敵の威力ば発揮したとばい！　臭うなかなら（臭くなければ）何の効こうね。臭うして汚かけん、魔物ば退散させ切ったろうが。うんこ爆弾の糞爆弾たい！　ねえ、なおたんく（直太のあだ名である）？」
　穢れを以て穢れを制す、というわけだ。昔から下肥としてあたりまえに活用されてきた糞尿だが、その話の中では――穢れに打ち剋つ――穢れという一側面だけが表現されていた。それはともかく、まずは怪奇譚から入って、途中からはスカトロジー（糞尿譚）へと変調していった、直太の口から出まかせの即興による一席は、途中から集まって聴いていた彼らにはウケた、それも大ウケといってよいほどにウケたわけだ。実際、話の展開が尾籠に傾く後半部、とくに結末に至る「うんこ爆弾」のくだりでは哄笑が弾け、手を叩いて喜ぶ子供も少なからず居た。ふだんはぼんやりしている直太の、知られざる剽軽な一面に出くわした彼らは、
「うんこで化け物退治が良かもん！」などと口々にいい合っては、直太の独り語りを部分的に真似ては再演してみせ合いながら、その場面をおもい出してはいつ迄も、ゲラゲラ、ゲラゲラ笑い合っていた。直太は直太で、最初は飽く迄も智佐子一人に聴かせようと語りだした即興の怪談のつもりが、途中から集まって来て話の突飛な変調に遭遇した仲間たちが示した、今迄に体験したことの無い顕著な反応に接して、さも愉快でたまらぬといった得意げな笑顔を咲かせていた。
　では肝腎の智佐子はというと、嬉しそうにニコニコしている直太を、彼が語った話の内容を憶い出しては赤面しながら、当惑、あるいは困惑気味といった風情で眺めていた、

　そんな事があった数日後、智佐子がことのほか真剣な表情で、直太にこう尋ねて来た。
「直ちゃんな、お化けがえすうなかと？」
　お化けが怖くはないのか、という単刀直入な問いかけに、直太は内心の動揺を強いて掻き消しながら、「何ぁんのえすかろうね、いっちょん（ちっとも）えすなか。いっぺんな、ほんなもんば見てむぅごたッ（一度は、本物を見てみたいもんだ）！――」こうまで大見得を切ってしまうと、かえって嘘を吐いている自覚も無く、清々しい気分だ。だが実際には、直太はその類のものを大の苦手とした。
　家では、姉の美奈子から夜の廊下かどこかの暗がりで、「お化けェ～」といって両手を前に垂れた幽霊のポーズで、よく脅かされるのだ。すると、たったそれだけでも恐慌を来して顔をこわばらせ、「ぎゃあーッ！」と泣き叫んでしまう。だいたい、「怨めしやァ～」ならわかるが、「お化けェ～」

と自己紹介して名乗り出る幽霊なんて、聞いたことも無い。それでも血相変えて怯えた挙句に、「ぎゃあーッ、もぉーおッ、ねえちゃん好かぁん！　おかあさぁん、ねえちゃんが悪かア～」といってベソを掻き掻き地団太を踏むのがオチなのだ。なんとも情けない、そんな自身の為体も、直太は都合好く失念していた。

　また、智佐子は智佐子で、直太が幼稚園児の頃には川魚問屋・中尾商店の一人息子繁昭やなんかに何かにつけいじめられ、その度にシクシクしゃくり上げてメソメソと泣いていた弱虫で、その涙を手ずから自分のハンカチで拭いてやったのは、彼女自身であったことなども、すっかり失念しているようだった。「へえエ、直ちゃんなやっぱり強かとやねえ、さすが男ン子は違うねえ！」と、さも感心した様子で、直太に頼もしげな眼差しを向けて来るのだった。

　直太は、智佐子の涙を湛えたつぶらな瞳に、直太自身への賞讃や羨望や憧憬の色をみて取り、俄かに素の彼に戻るや、こわくなった。幼稚園児の頃から大好きな智佐子を、純情可憐な彼女を、騙した。それもついこないだなどは、即興といえば聞こえはいいが口から出まかせの作り話で脅かしたうえに、今はまたこうして己がさみしい虚栄心から欺きつつある自覚が、直太にもやもやとした罪悪感じみた感覚を抱かせたのだ。その疚しさは、智佐子に対し、返さねば気が済まぬ借りでもつくったかのような心理的負担となって、直太の魂を圧迫した。直太は直太なりに真剣に悩みはじめた。

　――ばってん、そんなら……っちゅうて、どげん為ゅうか？

　その自問に対する答えは、とどのつまりが、智佐子が怖がるお化けの存否やその正体を暴き、もし脅威となるようなら二度と出て来ぬよう退治してやることに他ならなかった。もしそれが出来たなら、彼女を欺いたことへの罪悪感という心理的負担を撥ね除け、虚栄心からでなく真の矜恃から堂々と、彼女の前で胸を張れそうな気がした。それには、胆試しのような冒険的行為を敢行して勇敢にもやり遂げ、その壮挙を以て智佐子に報いねば、

　――男が立たんばい！

　という心境だった。父誠人は、直太がまだ幼児だった頃から、この甚だ惰弱な息子に対して、「男児たるもの斯くあれかし！」と事あるごとに心得を説くような、直太にとって実に傍迷惑な一面を持つ父親だった。だが、智佐子のいう「直ちゃんなやっぱり強かとやねえ、さすが男ン子は違うねえ！」には、直太をまるで誠人の訓戒を実践するよう後押しするかの魔力が備わっていた。そこで直太は、

　――よしッ、そんならいっちょ放課後の北校舎ン中ば探検して、もしお化けン出っとなら、そン化けン皮ば引ッ剥がしてやらやこてッ（やらねばならぬ）！

　放課後の北校舎に怪異が現れるという噂話の真偽を、実地に踏査して自分の眼で確かめ、あわよくばその正体を暴いて退治すること。この冒険を通しての真相究明に成功すれば、

智佐子を脅かす恐怖の元凶を取り除き、彼女を安心させてやれると考えるに至った。ただ、その壮挙と呼ぶべき探検を実行に移す迄には、それなりの周到な準備を要するのだった。

【四】

直太にはその前年、まだ晩夏のなごりが残る初秋の頃、待望の弟が誕生していた。姉の美奈子からは相変わらず郷原家の恥さらしと罵られる、

――不肖の弟。

そんな直太が、一人の弟を持つ兄となったのだ。「剛郎（たけお）」と名づけられた弟は、さすが兄弟だけあって直太によく似て、よく太えて、とても愛くるしい赤ん坊なのだが、生まれた直後はそうでもなかった。

剛郎が夜の間に生まれた翌日、下校して来た直太はすぐに自宅から程近い県立病院へと急いだ。もちろん、初めて自分の生まれたての弟と対面するためだ。赤ん坊、それも自分の弟ともなれば可愛さもひとしおだろうと、期待と確信を抱いていざ対面してみると、想像していたのとかなり違っていた。なるほど赤ちゃんというだけあって、小さな顔も手足もどこもここもたしかに赤いが、その赤さのためか、お猿っぽくもある。そんな貧相で変な顔をしたのが、穏やかに笑っている母節子の寝台の脇に置かれた、新生児用の小さな籠のような褥の上に寝かされて、すやすやと眠っていた。残念ながら、ずっと想像していた感じの可愛さとは、かなり違っていた。なんだか、裏切られた気がした。

その人間と猿の合いの子のような、貧相な生き物をみて軽いショックと落胆に見舞われていると、雇われて母子の世話をしている付き添い婦のおばさんが、その赤ん坊を直太にそうっと抱かせてくれて、

「こげんお顔の立派に整うとる赤ちゃんも珍しかですよ。ほんに可愛かでしょうがァ。ねえ、ほぉら――」と、頻りと褒めそやした。だがやっぱり直太にはその赤ん坊が、自分の弟にしてはあまり可愛く感じられなかった。だから、まだ子供の自分と、このおばさんのような大人とではきっと、おなじ赤ん坊をみても見え方が違うんだろう、とか、こういって大げさに褒めてくれるのもお世辞という例の、大人たちが度々口にする罪の無い嘘の類だろう、などと考えながら、そのちっぽけで眠たそうな奴をぼんやりと眺めていた――。

だがそんな剛郎も、日を追って次第に、確実に人間の赤ん坊らしくなった。それとともに、幸いな事には可愛いさも日に日に増してきた。直太が二年生に上がる頃迄には、さすが兄弟だけあって顔立ちも直太に似てきて、顔や躰が丸々と太っているのも兄譲りという感じだった。

ただし、兄の直太がいかにも鄙の童子らしく田舎くさい、どこか垢抜けぬ容貌なのに比べ、剛郎は、長い睫毛が縁どる二重目蓋の目元がパッチリとして、「あらッ、お嬢ちゃんじゃなくて坊ちゃんでしたか！」と、時々女児と見紛われるほど、やさしげな面立ちをしていた。直太は、そんな剛郎の可

愛さが誇らしくて、自慢して触れ廻りたいくらいだった。今は亡き祖父文蔵が、直太に対して似た思いを抱いたように。

また、イザという時には剛郎を守ってやれるくらいの、頼り甲斐のある兄貴になりたいと念ずるようになった。そうなるためには、

――北校舎にはお化けンず（出）っげなばってん、そげなお化けてろんばえすがりよるごたるふうじゃ（お化けなんかを怖がっているようでは）、出来んばいッ！

ならば、自分がその化けの皮を引ッ剥がし、ひとつその正体を暴いてやろうじゃないか！　お化け退治を考えた理由、その第一は、

――チサちゃんばえすがらせよるお化けば、俺ィが、いっちょどげんかしてやらにゃ出来んめぇもんッ！

そうおもったことだ。その動機に、剛郎という可愛い弟を持つ兄となった自覚も重なって、

――放課後の北校舎を探検すべし！

とはいえ今すぐ探検するのは、いくら「かんなし（考え無し）君」の異名をとる直太でも、探検や冒険には危険が付き物であるがゆえに、さすがに無謀すぎるという、珍しく深謀遠慮がはたらいた。それに、せっかくやるのに単独では、正直いって怖すぎて、しかも面白味に欠ける。そこでまずは、お化けに関する情報収集に努めることにした。すなわち、誰かが七不思議めいた話でも、ひそひそと語りはじめようものなら、それが北校舎にまつわる話だろうとなかろうと、必ず聴き耳を立てて熱心に聴き入った。そうして、どうしたらお化けと遭遇しやすく、また、どうやったら退治できそうか研究し作戦を練ろうと心懸けた。

そうこうするうち、ミイラ取りがミイラになるじゃないが、怪談・奇譚とか怪異譚などと呼ばれる不可解な話のおもしろさに覚醒め、その虜となっていった。

そうした趣味嗜好と、夜、家の廊下の暗がりで姉から「お化けェ～」といって脅かされただけで忽ち浮き足立って、「ぎゃあーッ、もぉーおッ、おかあさぁ～ん、ねえちゃんが悪かア～！」と泣き叫んでしまう為体とは、矛盾するようでいて、実は矛盾しない。理由はかんたんで、そうしたオカルト的な怪奇趣味などというもの自体が、スリルを売り物とする以上、怖くないとつまらないからだ。端的にいえば、

――怖いからこそおもしろい！

では、片や「おかあさぁ～ん、ねえちゃんが……！」と泣き叫ぶ怖がりゆえの為体と、片や怪奇趣味との、その微妙な相違が奈辺にあるのかというと……。

前者は、こうした局面に際して何故こうも人が悪くなれるのかと直太がおもう、姉美奈子の悪ふざけに無理やり強引に、不可抗力的に巻き込まれてしまう、いわば災難に遭う類に属する。しかも、幼い直太の魂には未だそれを撥ね返すだけの反発力――度胸や勇気や胆力が備わってはいなかった。対するに後者は、直太が小学校に上がった一年生の夏に初めて体験した鍛冶屋町子供会主催の試胆会――中三を頭に末は小一

までの男子が真夏の一夜だけ、町内にあるお稲荷さんのお堂に参集して行われた肝試しの会で、前半は専ら年嵩の子供らが語り部を務める怪談会が用意されていた――がその典型であるように、車座的な共同性において、仲間たちとの一体感を強化してゆく中で展開されるのだった。

最初のうち直太は主に教室で、仲間の誰かが仕入れて来た怪談を専ら耳をそばだてて聴く側にいた。が、やがて聴く一方では飽き足らなくなって、直太も、その試胆会仕込みの怪談を再話するかたちで披露するようになった。むろん、小二当時の直太に怪談用の話芸的な技術など、その初歩すら未だ備わっておらず、たいてい未熟で稚拙な訥弁にて語る他ない。が、年長者たちから聴かされた座の、その場の雰囲気を想い出しながら、それをまた自分が再話し言葉にするのも怖い怖いとおもいつつ、物語る。すると、直太が語りながら感じているスリルは、息を詰めて聴き入っている仲間たちにも次第に伝染するようだった。

そこに、戦慄と震撼と恐怖の共感が生じる。

その共有された恐怖で結びついた親密性のうちに、一話か幾話かの怪談語りが行われる。すると、語るか、あるいは聴き終え、仲間と別れて一人一人に戻った後でも、とくに怖毛だつようだった場面の細部が、さっき感じたよりいっそう恐怖感を増幅され、各自の記憶に繰り返し甦ってきては、ぞわぞわぞわぁ……と彼らの背筋を寒からしめるのだった。こうして直太は仲間たちと共に、半ば直太が自分で惹き起こしたといってもよい怪談ブームに、自らも巻き込まれていった。

とはいえ、直太が仲間たちと語り合った話自体はどれも大抵、ある程度年齢を重ねた人なら一度はどこかで耳にしたことのある内容で、数あるその種の話としては、筋立ても趣向も怖さの質も類型的だった。全国津々浦々、どこの地方や地域の共同体にも伝わっていそうな、つまり人口に膾炙した観のあるお化け話の類だ。しかし、それだけ定番と化す迄には、語り継がれてくる過程で、自ずと彫琢され洗練されてきたからこそ完成度の高い、趣向なり話型なり結構なりを備えるに至ったのだろう。

しかし当時の直太たちは、人生を歩みだして未だ七歳かそこらにすぎず、物心がつき始めてからとなるとさらに日が浅かった。彼らの前に世界は、はかり知れぬ謎を秘めた未知の領域として茫洋とひろがっていた。そんな彼らにとって、仲間たちが持ち寄って来て語る怪談はどれもが大抵、陳腐などころかじゅうぶん新鮮で、刺激性に富み迫力があって、とどのつまりは、怖くておもしろかった。

くわえて忘れてはならぬのは、北校舎という場が持つ迫力だ。

この老朽化のすすんだ蒼古たる建造物は、外観ばかりか内部も昼なお薄暗く陰翳に富み、常に陰鬱なる雰囲気を醸していた。そんな北校舎に足踏み入れた人は、そこが現実に怪異現象が起こりそうな場所であることを体感し、これほど怪談を語るのに適した臨場感に富む場所もないと納得するのだ。

したがって、昼休みはもちろん、授業時間の合間の休憩時間だって、教室内のどこかで誰かが「ねえ、こげな話、知っとるや？」とでもいえば、お化け話の始まり始まり――。

街ぢゅうを掘割が廻っている鄙びた小さな城下町――。そこは「水郷」という表向きの顔の裏側、あるいは奥深くに、もう一つの顔を隠し持っていた。土俗的な怪談・奇譚・怪異譚といった、摩訶不思議な口碑を培っていたのだ。

そこは神社仏閣の過密地帯でもある他、街中の辻々には地蔵尊に不動尊、布袋尊に恵比寿・大黒といった小さな神々の祠が点在していた。そんな街に暮らす人々は、今以てそれら各種の神霊への礼拝を怠らず、巷をさまよう亡魂たちやあやかしの実在を殊更に疑わず畏怖していた。もし何かしらの冒涜行為でも為そうものなら、てきめんに神罰や祟りの災厄がふりかかって来るものと、その手の因果応報説を信憑して暮らしていた。

だから、直太くらいの年頃の子供たちも当然、その影響下にあった。大人たちから事あるごとにいわれるのは、まず、「そこんにきの（そこいらの）掘割に小便どんまりょんなら（放尿でもしようものなら）、ちんぽン腫るったい！」と、この事だった。「なんでね、ちね？　ソラおまえ、掘割にゃ水ン神様の棲んどらっしゃって、そン手先ば為ょる河童が見張っとるけんに決まっとろうもん。そン河童の、俺ィどんが掘割ン水ば穢しょっとば見たらいいつくっけんがら（いいつけるので）、水ン神様の腹掻ぇて（腹を立てて）祟らっしゃって神罰の当たって、後でちんぽの腫るっとくさん（腫れるのさ）――」こうした教訓話が流通していたのは、まだ掘割が貴重な生活用水の供給源として機能していた時代の名残であろうが、依然として警句としての効力を失わずにいた。

直太の遊び友達の中には、身を以てそれを体験した者もいた。その井口辰也という子供も、件の禁忌を破って掘割に放尿した翌朝には、彼の小さな陰茎がムズ痒さを伴ってぷっくりと赤く腫れあがった。そこで家族に相談し、拝み屋の婆しゃんと呼ばれる土着の呪術者を頼んで、そうなった原因を占って加持祈祷して、治してもらったというのだ。もちろん真の原因は他にあって、汚れた手で触ったので尿道からバイ菌が入って炎症を起こし腫れあがったとか何とか、そう推測するのが妥当かつ科学的な解釈だろうが、そんなふうには考えない。「ほんなって（ほんとうに）掘割にゃ水ン神様の棲んどんなって、水ば汚す悪さば為っと腹掻きなはっとばい。だけん、俺ィがちんぽの腫れたろうが。ちんぽの腫れたつぁ、掘割に小便ば放（ま）ったつで、水ン神様の腹掻かしたけん神罰ん当たったとばい。だけん、拝み屋の婆しゃんのお詫びば入れて、水ン神様に赦してもろうたっちゅうわけたん――」

それで腫れが忽ち退いて治癒したというから、不思議だ。

また、事例を往古に求むるなら、とある上級武士の娘が上厠した際、ご不浄の穴から何者かの手がのびて来て、無防備となったお尻を、女陰を撫でられそうになった。だがその武

家娘という人、さぞかし武芸にも秀でた剛胆かつ敏捷な女性だったのだろう。たしなみに帯に手挟んでいた懐剣をすばやく抜くが早いか、その卑猥な悪戯を為かけた不届き者の腕を、すぱッ、と斬った。途中から斬り落とされたその腕は、「河童の手」のミイラとしてお家重代の家宝とされているそうな――。

人が用を足す途中で下から、後架の穴から河童の手がのびて来る辺りに、厠がまだその名のとおり川の上に架設されていた時代の名残を感じさせる。この話は、祖父文蔵が生前、直太を連れて堀端を散歩しながら、幾度となく繰り返し話してくれた一つ話だった。「……そしたら便所ン中から、ぬちゃーっち濡れた手の、にゅーうっちのびて来て、着物ン裾ばまくり上げたお姫さんの美しか尻ば、ぺしゃッち触ろうで、ぺしゃぺしゃぺしゃーッち撫で廻そうでしたもんやけんがら、お姫さんな、『あいぃたコラ、にやがり者（悪戯者）の河童めが為様ン無か悪さば企んで、どんこんなん（どうもこうもならぬ）！』ちゅうて、河童ン手頸ば掴まゆっとが早かか、守り刀の鋭うして切れ味ン良ぉかつば抜いて、すぱッ、ち腕ばチョン斬りなはったつげなぞ、直太ァ……」

筑紫次郎の異名をもつ筑後川の下流域に開けた水郷地帯――。そうした土地柄、水と切っても切れぬ関わりを持つ妖怪の代表格といえばやはり河童で、河童にまつわる口碑・伝説・昔話の類は人口に膾炙し、その時々の語り手が様々に趣向を凝らすなかで伝わった。きっと文蔵自身も子供の頃に、この手の河童や、またそれ以外にも多くの異類たち――妖怪・物の怪・妖魔といった連中――が登場して人間と関わる、ちょっと不気味で、時には滑稽で、また時には淫猥な話を度々聴かされて育ったのだったろう。

もっと郷土史的な事蹟に関わるものなら、高校で国語の教鞭を執る父誠人が詳しくて、直太にも話してくれた――。

有明海に注ぐ沖端川下流域に、船だまりと呼ばれる漁港を中心に開けた沖端地区では、漁師のことを「ろっきゅ」と呼ぶ。「六騎」が訛ったこの地域に独特の方言だ。その昔、壇ノ浦で滅んだ平家一門の落人六騎が逃げ延びて来て、有明の海の幸をすなど（漁）って、この地で定住生活を始めた。真偽はともかく、その事蹟をこの漁師町の発祥とする故事来歴に因む。誠人が直太に語り聴かせたところによると、そんな「ろっきゅ」たちが暮らす漁師町にも、たとえば次のような怪談・奇譚の類が語り伝えられていた。

ここで時代は源平争乱の世から一気に駆け下る。天下人・太閤秀吉といえども、晩年に至っては老耄に発した誇大妄想ゆえにか、明まで攻め込もうと彼の軍門に降った戦国大名たちに出兵を命じ、手始めに朝鮮侵略を企てた。当時この地を治めていた勇将の誉れ高き立花宗茂も、軍船を仕立てて対馬海峡を越え、朝鮮半島に攻め入って防戦する敵軍との激闘を繰りひろげた。ところが、天下人にも死は庶民と平等に訪れて秀吉の命脈尽きたのを機に、野戦に野戦を重ねて疲労困憊した駐屯軍の陣を退き払い、再び渡海して帰って来た。

その際、帰国後に行う論功行賞のためにか、殺戮した朝鮮の兵たちの遺骸から切り取った大量の耳を、塩漬けにして軍船に積み込み持ち帰って来た。そして、その夥しい数の耳を供養して埋葬した場所に、「耳塚」を築いた。その耳塚は、有明海から沖端川の河口を遡ったところに位置する「ろっきゅ」の町、沖端の一隅に築かれた。また、その耳塚がある場所には、樹種は知らぬが大木が一本、そこに耳塚が築かれる以前から亭々と聳えて立っていたという……。

「そン大木の、空ば覆うごつ枝葉ば茂らせた下ば、夜になって真っ暗な闇の、鼻ば抓まれたっちゃわからんごつ濃ゆなっとるところば、深夜、何かの用事で人が通りがかりょっと、そン人の耳に、誰かの泣く声の、そりぃも大勢の人たちのすすり泣く声の、まるで幻聴ばきくごつきこえて来っとげな。『誰ぃも居らんがねえ……？』ち不思議におもうた人の、提灯ば泣き声の聞こゆっほうさん、ちゅうたら大木の根から幹の伸びてゆく方さんめぐらして、光に照らしてよう見るぎっとくさん、そン途端、『ぎゃあーッ……！』ちゅうて悲鳴ばあげて逃げ出そうでした。そらぁもう、這う這うの体で逃げ出そうで為っとばってん、腰の抜けたか、足の萎えたかしたごつなって、いざるとがやっとでよう逃げ切らん。そりぃもそン筈で、大木の幹やら枝やらの至る所から何かが生えとるとばようとみるぎっと（何かが生えているのをよくみると）、ばぁさろううか（非常に多い、夥しい）数の、人間の耳……、ほら、顔の横についとる、こン耳じゃったげなたい！　耳、耳、耳、耳、耳、耳、耳……。無数にのぼる人間の耳の、もうビッシリ生えたつの、提灯の灯影に照らし出されて、わわわわわわわわぁ～ッ、ち、耳やけん、みみみみみみみみぃ～ッ、ちゅうた感じで、闇の底から一斉に浮かび上がって来たとげなたい！　その光景、そン眺めちゅうたら、そらぁもう気味の悪うして、えすかったろうやア（怖かったろうねエ）！　そン恐怖ちゅうたら、みてしもうた者ば錯乱状態ちゅうて、一時的に気の狂うたごたる状態に陥らすっとに充分やったろだい。結局、そン耳塚の傍に聳え立っとる大木が、日本の軍勢のほんに残忍か、無慈悲で残酷か侵略者どもに攻めて来られてからよ、惨たらしゅう殺されて、耳までチョン切られて奪い去られた数多の、たくっさんの朝鮮の人たちの怨みの宿っとる、憑代になっとったっちゃろたい――」

「ふーーーん……」と直太。たしかに、大木がすすり泣いたり、その樹皮から夥しい数の耳が生え出したりするようなお化けは、想像しただけでも恐ろしい。が、それだけではなかった。大木がお化けになった、その元はといえば……。そこへと至る理由というか原因を考えると、殺した者たちが恐ろしくて、殺された者たちは憐れで、そして悲しくてしょうがなくなった。

――なぁしけん（何故）そげな酷か、恐ろしか事の起こっとかね？

もちろん、こうした史実に因んだ怪異譚を、民衆が脈々と語り伝えてきた動機には、ただの怪奇趣味には収まり切れぬ

要素も含まれていたろう。つまり、権力者が恣なる強権に物いわせて惹き起こす戦争というもの、その酷たらしさ、恐ろしさ、そして虚しさと愚かしさ。また、幾千幾万という数の人間たちを巻き込んで狂わせ、冷酷残忍な修羅や鬼畜へと豹変させる、おぞましさ等々。そうした戦争への忌避感とともに、修羅の暴虐に遭い惨殺された異郷の民を、憐れとも痛ましくもおもう罪悪感や鎮魂の願い、それらも含まれていたにちがいない。まったく、怪談・奇譚・怪異譚といっても、ただ人を怖がらせるばかりが能じゃないのだった。

では直太はというと、この島国の軍隊が半島へ、半島伝いに大陸へと領土的野望を実現しようと暴走した、その背景的な史実を知り理解するには、もとより幼すぎた。が、いったん損なわれて途絶えるともう最後、けっしてつなぎ直せぬのがこの、玉の緒の命、というものであること、また、それを際限も無く要求し破壊し尽くそうとする、壮大なる愚行ともいうべき戦争……。父誠人から、その耳塚にまつわる怪異譚を語り聴かされる中で、直太は直太なりに、無残とも哀切とも悲痛ともいうべき感情を抱くとともに、それらの事柄について学んだのだった。

直太が語る怪談は、怪異譚とはいいながら途中からスカトロジーの糞尿譚といった、排泄行為や排泄物自体といった尾籠な意味での下ネタが絡む滑稽譚へと、いつの間にかずれ込んでゆくことが多かった。それは直太が、小学二年生になってもまだ幼児期の名残りをそのまんま引き擦っている、その幼児性の証左かもしれなかった。だがさすがに、父親から聴いた異国の兵たち――元を質せば異郷の民たち――の霊を供養した耳塚をめぐって起こる怪異現象――大木から発せられる鬼哭啾々の声とその樹木から生え出した夥しい数の耳、耳、耳……！――の話ともなると、彼の芸風ともいうべき脱線を己に禁じ封印して語ることとなった。

すると、クラスの仲間たちの中でも、直太がふだんから好ましくおもっている、幼稚園時代から仲良しのチサちゃんこと神崎智佐子が示す反応には、とくに鋭いものが感じられた。耳塚の傍に聳え立つ大木から何とも哀しげで怨めしげな泣き声が陰々滅々と響いて来て、不審におもってめぐらせた提灯の灯影に照らし出されて、大木の幹や枝の樹皮から生え出した、夥しい数にのぼる人間の耳が浮かび上がるくだりにさしかかると、「きゃあッ！」と堪りかねたような悲鳴をあげた。よほど想像力に富む質らしく、いつも清潔な物を身につけているハンカチを両の掌の中にギュッと握り締め、そのハンカチで顔の下半分を覆い隠すようにして、目を潤ませ息を詰めて、ただ恐怖する以上の真剣な表情で聴いていた。

その時の智佐子は、怪異譚には付き物の不気味さ怖さ恐ろしさといった、ただ感覚的な要素にのみ感応していたのではなかった。むしろ、その怪異の発端をなす、昔の自国が他国にしかけた侵略戦争、その戦禍に抗いようも無く巻き込まれ、まだまだ生きたかったのに酷くも殺された幾多の異郷の人た

ちと、彼らの損なわれた命……。彼女の思いは、修羅と化した人間の為せる究極の蛮行で悪行である、戦争へと向かったのだった。と同時に、戦争によって悲惨な死に様を強いられた人たちの、哀切極まる無念にも、浮かばれずしてこの世に遺った、彼らの怨念にも及ぶらしかった。だから、その耳塚にまつわる怪異譚を、ただ単純にお化けが怖いという感覚を超えた、より奥行きの深い感銘を以て受け留めている様子だった。

直太もまた、その耳塚にまつわる怪異譚に戦争への忌避感を抱いたのだった。しかし、智佐子が抱いた直太よりもいっそう深甚な感銘と、その深さにまでは想い至らなかったのだろう。彼の目に映った彼女からの顕著な反応を、ただただ自分が語ったこの話の迫力に圧倒された結果だと独り決めして、

――俺ィが話の、ばぁさらかえすかったけんがら（とても怖かったから）、チサちゃんな泣きょっとばいねェ（泣いてるんだねェ）！

なんとも単純に喜び、すっかり調子に乗って、自分に課したあの――怪異譚を語ってゆく途中で、主人公が危機に陥ると切羽つまった便意を催し、放（ひ）り出した糞便を化け物に浴びせ、敵をその臭気と汚らしさとを以て追い払うような、大抵は尾籠な、たわいもない滑稽譚へと変調あるいは脱線して聴き手を失笑させてお茶を濁す――禁じ手をいつの間にか失念して解禁に転じた。そして、好色な河童が武家娘の尻を撫で廻そうと、厠の穴の下から手を伸ばして悪さを為かけ、その腕を懐剣で断ち切られたという、亡き祖父文蔵直伝の一つ話を、智佐子とふたりの周囲に集った連中に語って聴かせた。すると、この話に対する反応は大まかにいって、聴き手の性別によって、二分された。

まず男子は大抵、いったい何が可笑しいのか、後架の下の穴から伸びて来た手が、無防備となったうら若き女性の尻など撫で廻そうとする辺りで堪らず、「ぷッ！」と噴き出すのだった。そして、怪異譚というよりはエッチな滑稽話のように、仲間どうし躰を揺すり合うようにして、うふふ、わはは、げらげらげら……とその場面を想像して笑い崩れる者が続出した。だがしかし、正体は河童とされる不届き者が自業自得ながら、彼より上手（うわて）の武家娘から腕をチョン斬られるくだりにさしかかると、なぜか急に興醒めしたように笑い止んで、今度は、河童に同情するかのように痛々しそうな顔になって黙り込むのだった。

一方、智佐子を含む女子たちの反応はといえば、彼女らは、我が身を武家娘に仮託し置き換えて聴くのだろう。正体不明の相手に尻や陰部を撫で廻そうとされる卑猥で屈辱的な要素に、「厭らっさぁ～ッ、気色ン悪うして厭ばいやんッ！」などと嫌悪感を隠さなかった。が、その直後の、武家娘が懐剣を抜き放ち、剽悍な女剣士としての水際立った腕前を発揮して、けしからん不埒者の腕を美事に、すぱッ、と一刀の下に断ち切り撃退する場面では、喝采して喜んだ。きっと胸の閊えが下りるカタルシス（精神的浄化）の快感を覚えるのだろ

う。そしてその感覚に味を占めたのだろう。直太におなじこの話ばかりを幾度も、「ねえねえ、直ちゃんやん、あン河童の手の話ば為ちゃってん……」とせがむ、智佐子みたいな女子もいた。

　そのうち彼（女）らの中には直太を、クラスの誰より話題が豊富な怪談・奇譚・怪異譚および滑稽譚の語り部だと、勝手に買い被る者も出て来た。

「ねえ、なおたんくやん、おまえ他にも何か知っとっとやろォ？　ねえ、もっといっぱい知っとっとやろもん。聴かしてみんって（聴かしてみろって）！」すると直太は、高校の国語教師をしている父誠人から再話して語り聴かされた、「俵藤太（藤原秀郷）の大百足退治」や「源頼光の酒呑童子退治」や「源頼政の鵺退治」といった、この国の古典文学の中にも現れる化け物の話を再々話して聴かせてやるのだった。すると果たして、そうした冒険譚や英雄譚の色合いを帯びながらも、ほんとうに出くわしたらさぞ怖かったであろう、鬼や大蛇や大百足に鵺などといった化け物が登場する話が、田舎育ちでも現代っ子の彼らに、案外とウケた。

　直太自身も含め彼らは、妖怪・物の怪・幽霊といったあやかしの世界に棲む怪しげな異類たちから、テレビの特撮ヒーローものに主に悪者役で出て来る巨大怪獣の原形ともいえそうな、巨体と怪力といかにも恐ろしげな容貌容姿に、強力な武器や魔力を備えた怪物や魔物まで、それらが登場する話をことのほか好んだ。もちろん、そうした手剛い魔物たちを、胆力と知略と武勇を駆使して打ち倒すことの出来る英雄たちや、奇想天外な突拍子もない方法――直太お得意の糞尿譚もこのバリエーションに含まれるであろう――であしらい難を逃れたり、逆に利用して幸運をせしめたりするトリックスターの活躍も、彼らのまだ小さな躰の中を流れる血を熱くして騒がせ、じっとしてはいられぬ気分にさせた。とにかくその手の化け物話は好まれ、直太にとってそうであったように、他の子供らにとっても魅力的な一ジャンルとして定着していったのだった。

　そもそも、その街ぢゅうを掘割が巡っている鄙びた小さな城下町の、いざ外敵が侵入して来て市街戦となった場合に備えて、わざと幅員を狭く取った道が微妙にかくかくと屈折また屈曲しながら伸びてゆく、人通りの少ない裏通りなど散策していると、昼日中であっても奇妙な話がひそひそと囁かれるのを、偶然もれきく機会が訪れぬとも限らぬ雰囲気があった。たとえば……。

## 【五】

　ある時、まだ小学校にやっと上がったくらいの直太が鍛冶屋町の自宅で、すでにどこかしらが壊れてガラクタにちかいおもちゃを手に、例の独り遊びに興じていた。するとそこへ、ちょっと所用があって近所まで出ていた母親の節子が、いつになく興奮した様子で縁側から上がって来たかとおもうと、居間でお茶を飲みながら新聞を読んでいた祖母の久代を相手

に話しはじめた。

「今そこのお寺（延応寺）さんの前で、金網屋とござ屋と酒屋の奥さんたちの話してあるとば聞いとったら……」と近所でもちきりの噂話を、息急き込んで披露しはじめたのだ。直太は、母親の声をきくとおもちゃ箱のある三畳間を散らかしっ放しで居間に現れ、「おかあさん、おやつ……」といって菓子をねだった。そんな直太に母親は、台所の棚の高い所からいつもお菓子を納っている大きな缶カンを下ろして、「あんまり食べ過ぎると晩ご飯がイケんごつなるよ」と釘を刺しつつ、直太の好きな袋菓子のひとつである黒糖かりんとうを菓子器に盛ってくれながら、話をつづけた。

　直太の家から前の通りを北へ真っ直ぐ歩いて行くと、蛇行しながらも東から西に向かって流れる沖端川にぶつかる。地元では「しお川」と呼ばれている、その干満差の激しい川に架かる「みなと橋」という木の橋から数百メートル東へと遡った、川っ縁の土堤道を下りてからすこしだけ内に入ったところに、話題となっているその一軒の医院はあった。母節子が伝え聞いて来た噂話というのは、直太も生前の祖父文蔵との散歩で土堤道の上から幾度となくみた憶えのある医院、そこの家族の身に起こった、極めて不幸な突発事故に関する話題のそれだった。

　医学を修めて親の後を継ごうと東京に遊学中だった、そこの医院の跡取り息子が、友達とドライブ中に事故死したというのだ。「なんかねえ、東京で知り合うたおなじ大学の仲間たちと、クルマ二三台に分乗して遠乗り出かけたつぁ良かばってん、途中から他ン人のつとクルマば互いに取っ換え引っ換えして走らせよったら、運転中に……」運転技術が実際の走行に追いつかず操作を誤ったか、整備不良か何かで故障が発生し自動車自体が操作不能に陥ったかして、死亡事故に遭って命を落としたのだった。

　久代は度の強い近眼で、瓶底眼鏡の所為かやや表情が鈍い。が、そんな彼女でもさすがに、「そらぁ気の毒っか！……」若くして不慮の事故に見舞われ不帰の人となった、当の医学生の息子と、その遺された家族が痛ましくおもえて堪らぬといった様子で、同情やら何やら各種の感情が入り交じった嘆息を繰り返した。「そン息子さんももちろん可哀想かが、子ば自分より先にそげな事故やらで喪うやら、親は親で堪らんめえたい、生き地獄ンごたろうたい！」そういって合掌すると、「なまんだぶ、なまんだぶ、なまんだぶ……」と念仏を唱えた。

　だが話は、それだけでは終わらなかったのだ。

　というより、そこからおもいがけぬ方向へと発展していったのだった。節子と久代、二人は反りが合わぬがゆえに、どちらかといえば不仲な嫁姑だった。しかし今は一味同心といった感じで、久代のほうから節子を手招くようにして、どこで仕入れて来たのか、ある一つの昔話を語りだしたのだった。

　直太もかりんとうを頬張りながら、母親からも祖母からも追い払われぬのをよい事に、ただ黙然と聴いていた――。

「今あン病院の建っとる、あすこンにきゃ（あの辺りは）昔ぁ、一面に葦の生い茂っとる草深うて広ぉか、しお川（沖端川）の河原の、なんじゃいろ寂ぃしかごたる葦原の、ずうっと続かっとったとたげなよ。そこさん（そこへ）通りがからっしゃった旅の坊さんの、あそこら辺にあった一軒の家に『一夜の宿ばお貸し願えまいかア』ちゅうて来らっしゃったとげなたい。そン家の男主人な、神仏に仕ゆっ身分の人ば泊むっとなら善か功徳になろうけん、『はぁ良かばんもぉ、どうぞどうぞォ』ちゅうて快う泊めた迄は善かったばってん、そン後が悪かった。坊さんの路銀とは別に、喜捨の浄財のちゅうて、それ迄あちこちから集めてさるいた（集めて廻った）大金の銭ば持ち歩いとっとば見た途端、俄かに欲の皮の突っ張ってきてから、もうどげん為たっちゃ欲しゅうして欲しゅうして堪らんごつなってねえ、太ぉか銭の。そりぃでとうとう、『そこン葦原の奥に、お地蔵様の祀られとり召すけん参って、お経でんお念仏でん良かけん上げて、お慰め申してもらゆっとほんに有り難かが』の何のち巧い事いうて、そン見渡す限り葦の生い茂っとる、ちょっと分け入ったらもう人目につかんごたる葦原ン中ぇ誘い込んだ。いい加減入り込んだとこりぃで、坊さんの信用して油断しとらすとば見澄まして、ふだんから身に帯けとる脇差ば、しゃッ、ち抜くなり後ろから、ずぶうッ、ち突き刺して、魂消って振り向いたとこりぃば、ばざあッ、ち斬りつけ……、もうとにかく血腥か事っで、命乞い為っとも聞かんな惨たらしゅう殺してしもうた。そら、金目当てに騙し討ち喰わさるっ方は、堪ったもんじゃなかよ。そらぁもう最期は、死んでも死に切れんごつ悔しゅうて、敵の怨めしゅうて憎うて堪らんもんやけん、息の根ば止めらるっ間際に、くわッ、ち鬼の形相んなって、『こン怨み、けっして忘れんッ！』ちゅうて呪うた。『子々孫々まで祟って末代までも仇を為し、きっと滅ぼさずに措くもんかッ！――』ちゅうて無念の憤死ば遂げらっしゃったが、そン痛ましかむくろは葦原ン中ぇ穴掘って埋めたとげな。そン人殺しの家な、旅の坊さんば殺して奪うた金ば元手に新しゅう商売ば為だしたら、こりぃがおもしろがごつ当たって儲けだして、とうとう何とか長者ち呼ばるっごたる大金持ちになった。ばってん、長者にゃなったが後から出来た子は、そりぃこそ親の因果ば背負った、生まれつき盲聾唖の三重苦の不具者じゃったげなたい。そして、そン子がやっとすこし大きゅうなった、ある晩、見えんはずの目ばうっすら気色ン悪ぁ～るかごつ開けたつば、蒼白ぃ～ろ光らして主人ば睨んでから、物いえんはずが男主人にゃ聞き憶えのある、忘るぅごたったっちゃ忘れられん殺された坊さんの声で、『ちょうどこげな夜やったろうがア、そこン河原の葦原ン中で殺して、泥ン中ぇ埋（い）けが込んだつぁア』ちゅうたついでに、そン年のそン月の日にちまで、ぴしゃりいい当てたげなたい。そりぃでもう男主人の魂消り様ちゅうたら、カア～ッ、ち頭に血の昇って、そしたら自分でんわけのわからんごつトチ狂うて、『……はッ！』ち気のついた時にゃもう、我が子ン細ぉ～そか頸の咽喉元ば

指先の爪のこう喰い込むごつ、ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅうッ、ちちかっぺ（力一杯）掴んで扼殺して済ました後やったげなア。そりぃで、いっぺんに我に返って、すこたえて（慌てて、うろたえて）、女房やら他の子供やらにも知られん裡にそン子のむくろば担いで、家ン前の葦原ば突っ切って川っ縁さん運ぅで行ったって、しお川の岸から水の流れよる中ぇ、どぶーんッ、ち投げ込んだ。後は、もともと目の見えんじゃった子のわがで（自分で）川にはまって、口も利けんなら助けも呼べんな流されて、わがで溺れ死んだごつ見せかけて、一時ゃ空涙もしたばってん、後は何喰わぬ顔で暮らしとったげな。ばってんやっぱし、呪いの祟りのちゅうて、こげん恐ろしか事ぁ無うして、未ぁだ終わっとりゃせんじゃった。上の子の祝言か何か身内の祝儀事のあって、我が屋敷ン中の座敷に人ば大勢招いて賑やかに祝宴ば開いとった最中、そン人殺しの男主人な突然面変わりのして、気の狂うた山犬か何かの獣ンごつ目ば血走らして、魔物にでん取っ憑かれたごつ暴れ狂いだしたつげなよ。発狂して例の脇差ばまた、しゃッ、ち抜くと振り廻して、誰彼の見境も無う斬りつけた。とくに我が女房・子供はあらかた皆殺しの根絶やしにして、さんざん刃傷沙汰に及んだ挙句に最後の仕上げは、我が咽喉元かドテッ腹かどっかに、ずぶうッ、ち突き立てたら、ずぶぶぶうッ、ちカッ捌いて自害して果てたつげなよ。あア、因縁の因果の何のち簡単にいいよるが、人が人ば呪うたり、また死霊になって祟ったり、恐ろっさ恐ろっさア！――」

久代は、地元でいう「げなげな話」の伝聞調ではありながらも、まるで彼女自身が見て来たような講釈師ぶりを披露した。そうして、こうしてその怪談といってもよい因縁話の一席を語り終えると、冷めかけたお茶をさも美味そうに、ずずうっ、と啜った。その様が直太の眼には、とても満足そうに映った。

節子は節子で深刻な様子で、久代の話が凄惨な人殺しの場面に三度までさしかかる度ごとに、「んまァ……！」などという感嘆詞を、怯えた調子の合いの手でも入れるように差し挟みつつ聴き入っていたが、「ばってん、ほんなこつやろか？　ほんなこて（ほんとうに）、そげな事の起こっとったつやろかァ……、恐ろっさ！　昔の呪いの、その土地のその場所に染み付いたごつなって、いつまっでん（いつ迄も）残っとって、因縁やら因果やらいうて今ごろになって祟ったつが今度の、病院の息子さんの事故やったっちゅうとなら、マア恐ろしか事もあるもんたい――」と戦慄しながら嘆息した。

すると久代が、冷めたお茶を啜った甲斐あって、熱演後の余熱を冷ましたふうの物腰で、「さあ、昔そげな血腥かごたる殺人事件の恐ろしかんの（恐ろしい事が）、ほんなこて起こっとったとかどうか……、そらぁわからん。わからんばってん、あたしも出た先で余所ン人から同じ事ば、『知っとり召すかんもぉ（ご存じですか）、実は昔、あすこンにきで（あの辺りで）こげな恐ろし事件のあったっちゅうて、げなげな話の伝わっとりますばってん……』ちゅうて、もうだい

ぶ前じゃったが聴かされたつじゃった。そいで、聴いて長ぅ経つ裡にゃ忘れとったばってん、節子さんの、病院の跡取り息子の事故死した話ば聞いて、急に憶い出したっじゃった――」と、いくらか弁解がましいような口調でいい添えた。

だが久代の、そのいくらか言いわけがましいような言い草も、節子の耳にはもうほとんど入っては来なかったろう。節子は今し方聴いたばかりの、久代の口からまことしやかに語られた話に、「いやぁ～、それにしたっちゃ、我が身から出た錆で家ごと身ば滅ぼすやら、廻る因果の恐ろっさア、はあ～、怖か怖か……！」と、彼女をして心胆寒からしめた怪談についての感想を、率直かつ感慨深げにもらしていた。金銭欲に目がくらんだ人間が、ほとんど葛藤することも無く人殺しにはしる。それだけでもじゅうぶん恐ろしいが、そうして殺された者の死霊が、かつて呪いを込めて予告したとおりに祟って、怨敵である生者を仇為して滅ぼすというのもまた、怖い。そうした恐怖がいったい何に帰せられる怖さかというと、結局は、自分自身も含めた人間というもの、またそれが抱く欲望や執着、悪意ある執念や怨念なのだった。つまりは、――人間の怖さ。

それに尽きる。節子はそれをどんなふうに受け留めたものか、急に直太のほうを振り向くと早々に、「あんた、こげな恐ろしか話やら聴きょんなら、また一人じゃ寝切らんごつなろたい、ほらッ――」追い立てるようにいったが、完全に遅きに失していた。久代が語ったその血腥く凄惨で、禍々しくて怖い物語を、直太も戦慄を以て聴き終えた後だった。

残忍な人殺しが行われる発端からしてすでに、その場面が夢に現れて魘されそうで、耳をふさぎたくなった。が、それでもとうとう最後迄、妙に心惹かれる怖いもの聴きたさで、聴き通してしまった。したがって、もともと怖がりな直太の幼ない脳ミソにも、その怖い昔話の顛末が、すでに強烈な印象を伴って焼きついてしまっていた。

むろん、むつかしい言葉や言いまわしもところどころに挟まっていて、全部が全部完全に理解できたわけではなかった。だが、その理解を超えた言葉がかえって、怪奇の世界への扉を開く呪文、その禍々しい響きを伴って伝わって来た。そうなると、ふだんから夢見がちで物語依存症的な子供である直太には、筋を追うのに苦労するほど難解な物語でもなく、話の粗筋はもちろん趣旨や骨子――怖がらせどころ――なども自然と直太の頭や心に、つまり身に沁み入って来た。とくに、旅の坊さんが今わの際で予告した「子々孫々まで祟って末代までも仇を為し」云々の意味は、逐語的には理解できなかった分まで、事後的に起こる惨事――その中には現代において、某医院の跡取り息子がドライブ中に落命した、その死亡事故までも含まれていたのか？――が遡及的に補って余りあるかのように、想い出す度ごとに、ぞぞぞぉ～ッ、と戦慄の悪寒がはしった。

どこ迄が現実に起こった出来事なのかわからず、ひょっとすると全部が誰かの創作による虚構かも知れぬ――。だが直

太は、大人たちが交わす世間話にもしばしば、こんな怪奇趣味の世界への入り口が待ち受けていることを知っていた。その影響もあって、いつの間にか怖がりのくせに怪奇趣味にハマり、彼のクラスに怪談ブームが持ち上がる火付け役となっていた。

直太がハマった怪奇趣味の元を質せば、やはり何といっても忘れてならぬのは、毎年盆前の八月上旬になると鍛冶屋町子供会主催で行われていた「試胆会」に、小学校に上がって初めて参加した体験だった。試胆会とは、つまり、

――肝試し。

それは、当時だから許された、専ら男児だけに参加資格を与えられた行事だった。上は中三から下は小一までのおなじ町内に住む男児が、お稲荷さんのお堂に集まって夜が更ける迄、町内の家々から集めた金で買った菓子を喰って遊んで親睦を育むという、たしかに娯楽の体裁をとって行われていた。だが、本来の趣旨というか主題としてはやはり、字義どおり少年たちの胆力を試すこと、またそれに併せて、彼らの度胸や勇気と気骨を涵養することといった、一種の通過儀礼および心胆の鍛錬が想定されていた。

その日の夕方、直太はいつになく気もそぞろに、そそくさと晩ご飯を食べ終えると、逸る気持ちを抑え難く、ふだん遊び場にしているお稲荷さん――そこが試胆会における基地としての役割を担っていた――へと出向いた。おなじ鍛冶屋町町内に住む少年たちが、ぶらんこと滑り台のあるそこの境内へと後から後から集まって来ては、いつもよりどことなく興奮気味に遊んでいた。のぼせ性の直太にとっては、その熱気に触れただけでもう、すでにただ事ではなく、気分が昂揚してくるのだった。

やがて開始時刻の七時頃となると、まだ夕焼けに赤く染まった空の下、リーダーを務める中三の変声期を迎えたおにいちゃんから、集合の号令がかかる。「早よ集まらんかア～！」のドスが効いたひと声で、それ迄ふだんどおりに遊んでいた直太より年嵩の子供らとともに、賽銭箱の置かれた階（きざはし）の下に靴を脱いで、お堂の中に上がり込んだ。肝試しの何たるかについて、いちおう聞いてはいた。だがイザ始まると、そわそわする余りぼんやりしていた直太も、他の子らに倣って格子窓のある内壁を背に座らされた。車座となって、まず何が始まるのかとおもいきや、自宅が天理教会を兼ねる世話役の「天理教のおっちゃん」――年嵩の子供らが気安げにそう呼ぶので直太も倣うことにした――の監督の下、

――怪談百物語。

中三を頭に中学生たちが各自で選りすぐりの怪談を、一話語ってはまた一話と幾話も幾話も入れ替わり立ち替わり、直太たち年少者相手に語って聴かせるのだった。むろん百話には及ばぬが、新参者の直太も含めた下級生たちはそれらの上級生たちの語る怪談を、うわッ、えすかァえすかァえすかァ～！……と途中で耳をふさぎたくなる、恐怖に堪えながら聴

いていた。たとえば、
――直太もいずれ通うことになる中学校は城の跡地にあって、かつて城郭が聳えていた天守台の小高い丘が、「へそくり山」と呼ばれて校庭の一画を占めていた。そんな場所柄、真夜中になると鎧武者の亡霊が甲冑姿で現れ、具足の音を不気味に響かせながら、夜警でもするつもりか校舎の内外を歩き廻るというのだ。そして、粋がって肝試しをしに不法侵入して来たワル連中に遭遇するや、いきなり抜刀して脅かすわ、どこ迄も執念深く追い駆けて来るわ……。これにはさすがの不良も臆病風に吹かれ、這う這うの体で逃げ惑うが、不思議とその時ばかりは校舎内が複雑に入り組んだ迷路と化し、自分の現時点での居場所も不明なら、侵入路までの位置関係や経路、さらに出口の在り処も不明で脱出できない。それでも幸い捕まって殺された者の噂は聞かない代わりに、疲労困憊・半死半生で夜明けまで逃げ延びたときには、恐怖のあまり気が触れたような錯乱状態に陥っていて、「よっぽどの度胸自慢でん、ばさろ（非常に。ばさらか、とも）ケンカん強か人でん、数日間なウンウン魘されて寝込むとげなぞ――」
そんな怪談を、陽が沈んで辺りがじゅうぶん暗くなるのを待つ間に、幾話となく聴かされるのだった。そうして時が経つ間に日も暮れて、ようやく宵闇が濃くなってからが、いよいよ冒険の本番。この城下町自体がそもそも神社仏閣の多い土地柄、鍛冶屋町界隈も例外ではなく、数百メートル四方に高密度で分布している。その中でも、とくに出そうな趣のあるお寺の墓地を見つくろい、あとは古びた病棟の建ち並ぶ県立病院の霊安室に面した中庭とか、病院の蔦の絡んだ塀の外側にある、気味悪げな林に囲まれた寂れたお宮とか……。そうした胆試しには絶好の現場を巡ってから、やっとお稲荷さんまで帰還して来る。それ迄のあいだは、各現場ごとにだいたい上級生・下級生のペアに分かれて本隊から離れ、そこの現場のいちばん気味が悪い核心部を、
――ほんなこて出るか出らんか……、出たら厭やなァ！
ぎゃぎゃぎゃッ、さっきお稲荷さんで聴かされた怪談の、鎧武者がどこ迄でん追っ駆けて来っとば憶い出した！　うぇ～ッ、気色ン悪さ～ア……、早よ行こうッ！
などとおもいながら探索し終えたら、また本隊に合流して次の現場に向かうという具合に、歩き廻りながら探検を繰り返す――。いつ頃から続く風習かは知らぬが、こうした年中行事がまだ残っている町は、当時ですらもう稀だったろう。そうした意味でも、直太は、年長者が語る怪談・奇譚・怪異譚を記憶しておいて受け売りで後から再話できる、そうした意味での好条件に恵まれた環境にいた。
だから直太には、自ら語り手を買って出て、もしくは仲間たちから乞われるままに――彼のまだ少ない語彙と拙い話術ではあれ――怪談を語って聴かせてやることが出来た。そうしてやると、彼らもますます怪談好きになって、新旧様々な話を競ってどこからか――誰からか何かの本からか――仕入れて来ては、直太に倣って披露した。それは、かりそめに惹

起された、まさに、

――怪談ブーム。

そう称んでも過言ではない現象だった。雨の日の昼休みなど必ずクラスのどこかで、誰かが誰かを相手に、その手の話を語りはじめる。すると、その周囲に自然と人の輪が出来て聴き入るようになった。

ところが、俄かに人気者となった直太が有頂天で過ごせた時期も、結局、ひと月とは続かなかったのだ。例の直太が一時売り物にしていた彼独自の芸風ともいうべき、怪異譚が途中からいっそ糞尿譚というべき滑稽譚へと変化する意味での「落とし話」も、その尾籠さゆえに良識派の女子たちからは、

――汚し、下品なり！

と、まあ至極妥当ともいえるクレームがつき、直太と趣味をおなじゅうする一部男子の熱烈なる支持者は根強く残ったものの、結局は飽かれてしまったのだ。もちろん、直太が好きなチサちゃんこと神崎智佐子のお気に召さないというのも、直太が糞尿譚を控えるひときわ大きな要因となった。

そこで、例の試胆会仕込みの追い駆けて来る鎧武者の話やら、祖母と母親が話していた、むかし金目当てに殺害された旅の僧侶だか行者だかの怨念が現代に甦って祟る話やら、父誠人仕込みの耳塚の傍に聳える喬木に現れた怪異やら何やら……。そうした古典的な正統派の怪異譚は、たしかに怖がられはしたものの、直太自身が、

――怖くておもしろかとばってんなア……。

そうおもうほどには、どうもウケなくなった。直太が語る怪談は古臭い、という定評なりイメージなりが何となく喰っ付いて来て、その殻を破るのは容易ではなさそうだった。

結局、直太好みの古典的怪談なんかよりも、後代「学校の怪談」として脚光を浴びることとなるリアルタイムの、同時代の学校を舞台に材を取った怪談のほうが、まず臨場感があって、ゆえにより刺激的かつ魅力的だというのだ。それでクラスメイトの中からは、児童書の中の怪談集を、あるいは上級生に兄姉のいる子供は怪奇漫画なんかを元ネタに再話して語る、そうした子供たちが雨後の筍のように現れた。その結果、姉美奈子とは正反対に読書嫌いの直太なんか、みるみるうちに彼らの陰に霞んでしまった。直太自身としては、それならそれで聴き手にまわって、自分好みの古典的怪談のほうは、独りで勝手に反芻して愉しんでいればよかったのだが、なまじ一度脚光を浴びてしまったがゆえの落魄感というか零落感というか、ここへ来て急に落ちぶれたようなさみしさが無くもなかった。それで、校舎内に現れる鎧武者やら、真夜中にすすり泣く無数の耳が生えた大木やら、金目当てに殺害された旅の僧の祟りやらの世界に、かえってのめり込むようになった。この、自分がこうだと思い込んだら一途に、たじろがぬ（虚仮の？）一念で貫き通す頑固な曲者ぶりに、郷原直太という子供の将来と成長の一面も垣間見えるようだった。

（つづく）